



文明互鉴视域下的东亚海滨城市研究国际研讨会

2025 東アジア沿岸都市研究国際学術大会

2025 동아시아 해안도시 연구 국제 심포지엄

会议手册

會議要項

회의 안내서

主办单位：福州大学（中国）、大阪公立大学（日本）、国立釜庆大学（韩国）
主催：中国·福州大学 日本·大阪公立大学 韩国·国立釜慶大学
주최：중국 푸저우대학교·일본 오사카공립대학교·한국 국립부경대학교

承办单位：福州大学社会科学研究管理处、福州大学外国语学院
運營：福州大学社会科学研究支援課、福州大学外国語学院
주관：푸저우대학교 사회과학연구관리처·푸저우대학교 외국어학원

协办单位：福州大学建筑与城乡规划学院
協力：福州大学建築·都市計画学院
협력：푸저우대학교 건축과 도시농촌계획학원

10月31日-11月3日
中国·福州

福州大学
Fuzhou University

目 录

会议日程	01
会议报告专家及发言简介	05
分科会专题研讨	17
发言摘要	26
福州大学简介	55
福州大学外国语学院简介	59
School of Foreign Studies	61
福州大学外国语学院日语专业简介	63
交通指南	65
参会人员名单	67
MEMO	73



会议日程

10月31日 14:00-21:00	外地来宾报到（酒店大堂签到处） 旗山梅园酒店（福州闽侯大学城店）、福州大学城永嘉天地亚朵酒店、福州中海凯骊酒店	
11月1日 08:20-08:50	本地来宾签到 地点：福州大学旗山校区图书馆博学厅	
开幕式 地点：福州大学旗山校区图书馆博学厅		
时间	议程	主持人
11月1日 09:00-09:30	福州大学 邱挺副校长 致欢迎辞	钟晓文 福州大学外国语学院 院长、教授
	福州大学建筑与城乡规划学院 秋原雅人教授 致辞	
	合影留念	
11月1日主旨演讲（第一部分） 地点：福州大学旗山校区图书馆博学厅		
时间	议程	主持人
09:30-10:15	主旨演讲（一）：韩国国立釜庆大学 芮东根教授 海洋城市的未来：重新审视东亚海洋城市大转折	钟晓文 福州大学外国语学院 院长、教授
10:15-10:35	茶歇	—
10:35-11:20	主旨演讲（二）：日本大阪公立大学 山东功教授 日本語の観察者たち：東洋人の日本語研究	葛 茜 福州大学外国语学院 院长助理、日语系主任
11:20-12:05	主旨演讲（三）：日本早稻田大学 宫崎里司教授 他者として定着する国際移動移民のアイデンティティ： 言語政策から見た東アジア海洋都市の包摂と排除	
12:15	午餐 地点：桃李园餐厅2楼	—
14:00-14:45	主旨演讲（四）：中国东北师范大学 韩东育教授 夏商文明与上古东亚海域的交往记忆 地点：福州大学外国语学院3楼学术报告厅	钟晓文 福州大学外国语学院 院长、教授
14:45-15:00	会场移动、茶歇	—

大会プログラム

10月31日 14:00-21:00	参加者受付（福州市外） 旗山梅園ホテル（福州閩侯大学城店） 福州大学城永嘉天地アトールホテル 福州中海凱驪（カイリ）ホテル ホテルロビー	
11月1日 08:20-08:50	参加者受付（福州市内） 会場：福州大学旗山キャンパス 図書館 博学ホール	
開会式 会場：福州大学旗山キャンパス 図書館 博学ホール		
時間	内容	司会
11月1日 09:00-09:30	歓迎の辞 福州大学 邱挺 副学長	鐘曉文 福州大学外国語学院 院長、教授
	ご挨拶 福州大学建築・都市計画学院 秋原雅人 教授	
	記念撮影	
11月1日 基調講演（第一部） 会場：福州大学旗山キャンパス 図書館 博学ホール		
時間	内容	司会
09:30-10:15	基調講演①：韓国国立釜慶大学 芮東根 教授 海洋都市の未来：東アジア海洋都市の大転換を再考する	鐘曉文 福州大学外国語学院 院長、教授
10:15-10:35	コーヒーブレイク	—
10:35-11:20	基調講演②：日本大阪公立大学 山東功 教授 日本語の観察者たち：東洋人の日本語研究	葛 茜 福州大学外国語学院 院長補佐 日本語学科主任
11:20-12:05	基調講演③：日本早稲田大学 宮崎里司 教授 他者として定着する国際移動移民のアイデンティティ： 言語政策から見た東アジア海洋都市の包摂と排除	
12:15	昼食 場所：食堂「桃李園」2階	—
14:00-14:45	基調講演④：中国東北師範大学 韓東育 教授 夏商文明と古代東アジア海域の交流の記憶 (会場：福州大学外国語学院3階 学術報告ホール)	鐘曉文 福州大学外国語学院 院長、教授
14:45-15:00	会場移動・コーヒーブレイク	—

分科会专题研讨		
地点：福州大学外国语学院		
时间	议题	主持人
15:00-18:00	分论坛 1：东亚海滨城市中的历史记忆与文化传承 会场：2楼 208	各分科会主持人
	分论坛 2：东亚海滨城市之间的文明互鉴与知识流动 会场：2楼 210	
	分论坛 3：东亚海滨城市中的移民社群与文化认同 会场：2楼 211	
	分论坛 4：东亚海滨城市在全球化进程中的角色与挑战 会场：3楼 306	
	分论坛 5：东亚海滨城市的城市叙事与国际传播 会场：3楼 309	
	分论坛 6：东亚海滨城市的建筑符号与遗产保护 会场：3楼 310	
	分论坛 7：东亚海滨城市的文学与思想史研究 会场：4楼 404	
	分论坛 8：东亚海滨城市的历史记忆与区域互动 会场：4楼 408	
	分论坛 9：东亚海滨城市的建筑人文与城乡规划 会场：4楼 410	
18:00	晚餐 地点：桃李园餐厅 2 楼	—
11月2日主旨演讲（第二部分）、闭幕式 地点：福州大学外国语学院 3 楼学术报告厅		
时间	议程	主持人
9:00-9:45	主旨演讲（五）：日本大阪公立大学 池平纪子教授 大阪湾沿岸都市在住の福清ルーツ華僑・華裔における宗教文化の継承と変遷	郑颖 福州大学外国语学院 日语系副主任
9:45-10:30	主旨演讲（六）：中国上海交通大学 王升远教授 场内与场外，渲染与余白： 《里斯本丸沉没》中战争记忆叙事之隐秘追求	
10:30-10:50	茶歇	
10:50-11:50	分科会专题研讨 各分科会主持人总结汇报	葛茜 福州大学外国语学院 院长助理、日语系主任
11:50-12:10	闭幕式	
12:15	午餐 地点：桃李园餐厅 2 楼	—
下午	自由交流、参会人员离会	—
11月3日 全天	参会人员离会	—

分科会 会場：福州大学外国語学院		
時間	テーマ	司会
15:00-18:00	分科会 1:東アジア沿岸都市の歴史的ナラティブと文化継承 会場：2階 208 会議室	各分科会代表
	分科会 2:東アジア沿岸都市間の文化交流 会場：2階 210 教室	
	分科会 3:東アジア沿岸都市における移民コミュニティと文化的アイデンティティ 会場：2階 211 会議室	
	分科会 4:グローバル化における東アジア沿岸都市の役割と課題 会場：3階 306 教室	
	分科会 5:デジタル時代における東アジア沿岸都市の語りと国際発信 会場：3階 309 教室	
	分科会 6:記号としての東アジア沿岸都市の建築と遺産保護 会場：3階 310 教室	
	分科会 7:東アジア沿岸都市に関する文学と思想史研究 会場：4階 404 教室	
	分科会 8:東アジア沿岸都市の歴史的ナラティブと地域協力 会場：4階 408 教室	
	分科会 9:東アジア沿岸都市の建築文化と文化遺産 会場：4階 410 教室	
18:00	夕食 場所：食堂「桃李園」2階	—
11月2日 基調講演（第二部）・閉会式 会場：福州大学外国語学院 3階 学術報告ホール		
時間	内容	司会
9:00-9:45	基調講演⑤：日本大阪公立大学 池平紀子 教授 大阪湾沿岸都市在住の福清ルーツ華僑・華裔における宗教文化の継承と変遷	鄭 穎 福州大学外国語学院 日本語学科副主任
9:45-10:30	基調講演⑥：中国上海交通大学 王昇遠 教授 内と外、「渲染」と余白：『リスボン丸沈没』における戦争記憶のナラティブに潜む潜在的志向	
10:30-10:50	コーヒーブレイク	
10:50-11:50	分科会報告 各分科会の座長による総括	
11:50-12:10	閉会式	葛 茜 福州大学外国語学院 院長補佐、日本語学科主任
12:15	昼食 場所：食堂「桃李園」2階	—
午後	自由交流・散会	—
11月3日 終日	散会	—

主旨报告专家及发言简介（按照发言顺序）



芮东根
(RUI DONGGEN)

韩国国立釜庆大学教授、博士生导师，美国加州大学圣地亚哥分校访问学者。现任韩国国立釜庆大学全球战略研究院及中国研究中心主任、中国区核心课题主管教授、教授评议会委员。研究成果丰硕，至今共发表论文 50 余篇，出版著作 24 部，涉及中国研究、中西方价值观影响、东北亚局势、海洋文化、乡村振兴、疫情期间政策偏好、风险感知等多个领域。此外，完成 3 部译著，涉及哲学、社会研究等领域。

海洋城市的未来：重新审视东亚海洋城市大转折

摘要

1405 年，郑和率领船队开启第一次远航开辟了东亚乃至全球范围内的海上丝绸之路，构建起连接东西方的海洋城市网络，堪称一场“海洋大转型”。

进入 16 世纪，东亚步入商业繁荣时代。以马六甲为核心的印度洋海洋体系得以巩固，同时形成了连接马六甲、马尼拉等南海地区与香港、上海、青岛等东海沿岸的海上网络。更进一步，构建起连接琉球与木浦、釜山、仁川等朝鲜半岛港口，以及日本平户、长崎、神户等地的东海海洋网络。在这一海洋世界的形成过程中，海洋城市扮演了关键角色。

然而自 17 世纪起，随着大西洋航海时代的扩张，东亚海域逐渐陷入被动殖民化的进程，自主权日渐丧失，被迫依附于西方列强，海洋城市的命运也随之发生转折。一方面被纳入全球海洋霸权体系，另一方面却经历了漫长的自主权丧失的历史。

当下，以国家为主体的海洋战略重心再度凸显，中国也通过“一带一路”倡议提出新的海洋构想。在此背景下，构建平等、和平的海洋关系，加强海洋城市间的互联互通，正成为我们面临的新时代挑战。此时，我们有必要重新审视东南亚及中日韩海洋城市的发展与联系。

基調講演者および講演内容の概要（登壇順）



芮 東根 氏
(エイ トウコン)

韓国国立釜慶大学教授、アメリカ・カリフォルニア大学サンディエゴ校客員研究員。現在、韓国国立釜慶大学グローバル戦略研究院および中国研究センター所長、中国地域主要課題主管教授、教授評議会委員を兼任。これまで50編余りの論文および24冊の著書を刊行。また、哲学・社会研究などの分野において3冊の翻訳書がある。研究分野は、中国研究をはじめ、東西の価値観の影響、北東アジア情勢、海洋文化、地方創生、パンデミック期の政策選好、リスク認知など多岐にわたる。

海洋都市の未来：東アジア海洋都市の大転換を再考する

講演概要

1405年、鄭和は艦隊を率い、第一次遠洋航海に出発し、東アジアのみならず世界規模の海上シルクロードを開拓した。これにより、東西を結ぶ海洋都市ネットワークが形成され、まさに「海洋の大転換」とも言うべき歴史的な転機が訪れた。

16世紀に入ると、東アジアは商業的繁栄の時代を迎える。マラッカを中心とするインド洋の海洋システムが確立されるとともに、マラッカやマニラなど南シナ海の地域と、香港・上海・青島などの東中国海沿岸を結ぶ海上ネットワークが形成された。また、琉球と木浦・釜山・仁川などの朝鮮半島の港湾都市や、日本の平戸・長崎・神戸などを結ぶ東シナ海の海洋ネットワークも構築された。この広大な海洋世界の形成過程において、重要な役割を果たしたのが海洋都市であった。

しかし17世紀以降、大西洋航海時代の拡大に伴い、東アジア海域は植民地化によって主権を喪失し、西欧列強への従属を余儀なくされる。その結果、海洋都市の運命も大きく転換し、一方では世界的な海洋覇権体制に組み込まれながら、他方では長期にわたる主権の喪失という歴史を経験することになったのである。

今日、国家を主体とした海洋戦略の重要性が再び高まりつつあり、中国も「一带一路」構想を通じて新たな海洋戦略のビジョンを提示している。このような背景のもと、平等かつ平和な海洋上の関係を構築し、かつ海洋都市間の連携と相互関係を強化することが、我々に課せられた新しい時代の課題となるだろう。したがって、今こそ、東南アジアおよび中日韓の海洋都市の発展と連携を、改めて見つめ直す必要があるといえるのである。



山东 功
(Isao SANTO)

1970年生。大阪公立大学现代系统科学研究科教授、大学史资料室主任、国际基干教育机构副机构长。

2000年毕业于大阪大学大学院文学研究科博士后期课程，获文学博士学位。曾任职于大阪女子大学、大阪府立大学，自2022年4月起任现职。专业领域为日语学（日本语学史）与日本思想史（日本语言思想史）。主要著作有《日语观察者——从传教士到雇佣外国人》（岩波书店，2013年）和《唱歌与国语——明治近代化的装置》（讲谈社选书 Métiers，2008年）等。

日语观察者——东方人对日语的研究

摘 要

在探讨“外国人的日语研究”这一主题时，以往的研究几乎都聚焦于西方学者对日语的考察。然而考虑到亚洲各国同样存在日语研究的历史，东方学者对日语研究的论述也理应被纳入讨论范畴。以朝鲜半岛为例，早在1415年设立的翻译机构“司译院”中，除汉学、蒙古学、女真学（清学）外，还专门开设了倭学（日语）课程。康遇圣编纂的《捷解新语》（约1676年出版）等日语相关著作，正是这一历史进程的重要见证。此后，除了崔鹤龄修订的版本外（如《改修捷解新语》1748年版、《重刊捷解新语》1781年版等），金健瑞编纂的《捷解新语文释》（1796年版）也相继问世。

在中国明朝时期，曾编纂过多部记载邻国语言的对译词典，其中以《华夷译语》最为著名。这其中，关于日语的有《日本馆译语》（识语部分注明为1549年，编者不详），其中收录了约550个日语词汇。此外还有摘录自薛俊《日本国考略》的《日本寄语》（1523年），以及郑舜功编纂的《日本一鉴》（约1565年）等重要文献。

东方学者对日语的研究在观察视角和态度上，与西方学者存在哪些差异，本文将基于明代海禁制度的影响，以及中华思想与外语观之间的关联性，对此展开深入探讨。



山東 功 氏

1970 年生まれ。大阪公立大学現代システム科学研究科教授・大学史資料室長・国際基幹教育機構副機構長。

2000 年、大阪大学大学院文学研究科博士後期課程修了・博士（文学）。大阪女子大学、大阪府立大学を経て、2022 年 4 月より現職。専門は日本語学（日本語学史）・日本思想史（日本言語思想史）。著書に『日本語の観察者たち—宣教師からお雇い外国人まで—』（岩波書店、2013）、『唱歌と国語—明治近代化の装置—』（講談社選書メチエ、2008）など。

日本語の観察者たち：東洋人の日本語研究

講演概要

外国人による日本語研究というテーマを掲げた場合、これまでは、西洋人の日本語研究について（のみ）の指摘がほとんどであった。しかしながら、ことは西洋のみならず、東洋においても日本語に関する研究がなされていた以上、東洋人による日本語研究への言及があつてしかるべきであろう。例えば朝鮮では、1415 年に通訳に関わる「司訳院」において、漢学や蒙学、女真学（清学）の他に、倭学（日本語）が扱われることになり、康遇聖の編による『捷解新語』（1676 年頃）といった日本語に関する著述が刊行されている。後に、崔鶴齡による改訂の他（『改修捷解新語』（1748 年）、『重刊捷解新語』（1781 年）など）、金健瑞編による『捷解新語文釈』（1796 年）も刊行された。

中国では、明代に近隣諸国の言語について記述した「華夷訳語」と呼ばれる対訳単語集がいくつか編纂されている。その中で、日本語については『日本館訳語』（1549 年の識語、編者未詳）があり、550 語程度の日本語が掲載されている。他にも、薛俊の『日本（国）考略』を抄出した『日本寄語』（1523 年）や、鄭舜功編による『日本一鑑』（1565 年頃）などが見られる。

こうした東洋人による日本語研究は、その日本語への観察や態度に関して、西洋人の日本語研究とどのような違いが存在するのか。この点について、明代の海禁秩序体制のもたらした影響や、中華思想と外国語観との関係をもとに検討を試みたい。



宫崎 里司
(Satoshi MIYAZAKI)

早稻田大学日本語教育研究科教授，应用语言学博士（PhD）。专业领域：第二语言习得、移民政策、语言教育政策、日本語教育。曾任澳大利亚国立莫纳什大学日本研究科讲师，现为早稻田大学大学院日本語教育研究科教授。曾担任普林斯顿大学研究员、牛津大学访问学者、东京大学国际高等研究所可持续性学联合研究机构客座教授，以及天津外国语大学、大连外国语大学客座教授。目前兼任越南日越大学博士课程“日本学与日本語教育项目”教授。

“被固化为‘他者’的国际移民身份认同”： 语言政策视角下的东亚海洋城市的包容与排斥

摘 要

随着全球化的深入发展，国际移民逐渐由短期逗留者转变为在地方社会中以“他者”身份长期定居的群体。本报告将以福州、釜山、横滨、长崎等东亚海洋城市为例，运用语言意识形态与语言权利的理论框架，分析通过语言政策所体现的包容与排斥机制。具体而言，通过比较多语政策的推行、学校教育中的支持措施、行政翻译机制以及区域媒体的话语实践，揭示影响移民身份认同形成的语言界限。同时，探讨语言包容与经济、文化融合之间的关联，并批判性地审视排斥结构的再生产机制。最后，报告将提出促进多元文化共生的包容性语言政策，以及构建可持续共生社会的可能路径。



宮崎 里司 氏

早稲田大学大学院日本語教育研究科教授、応用言語学博士（PhD）。専門分野：第二言語習得、移民政策、言語教育政策、日本語教育。かつてオーストラリア国立モナシュ大学日本研究科講師を務め、現在は早稲田大学大学院日本語教育研究科教授。これまでにプリンストン大学研究員、オックスフォード大学客員研究員、東京大学サステナビリティ学連携研究機構客員教授、また天津外国語大学・大連外国語大学客員教授を歴任。現在、ベトナム日越大学博士課程「日本学・日本語教育プログラム」教授を兼任している。

他者として定着する国際移動移民のアイデンティティ： 言語政策から見た東アジア海洋都市の包摂と排除

講演概要

グローバル化の進展により、国際移動者は一過的滞在者ではなく地域社会に「他者」として定着する存在へと変容している。本講演では、福州・釜山・横浜・長崎など東アジアの海洋都市を事例に、言語イデオロギーと言語権の理論枠組みを用いて、言語政策を通じた包摂と排除のメカニズムを分析する。具体的には、多言語施策、学校教育での支援、行政翻訳体制、地域メディアの言説を比較し、移民アイデンティティ形成に作用する言語的境界線を明らかにする。さらに、言語的包摂と経済・文化的統合の関連を検討し、排除を再生産する構造を批判的に捉える。最後に、多文化共生に資する包括的言語政策と持続可能な共生社会モデルの可能性を提案する。



韩东育
(HAN DONGYU)

东北师范大学学士、硕士，东京大学博士、博士后。教育部长江学者奖励计划特聘教授（2008）。研究方向为日本史、东亚思想史和东亚国际关系史。出版《从“脱儒”到“脱亚”——日本近世以来“去中心化”之思想过程》《从“请封”到“自封”——日本中世以来“自中心化”之行动过程》《从“道理”到“物理”——日本近世以来“化道为术”之格致过程》等专著多部，发表论文多篇，主持中外研究项目多项，先后荣获教育部第七、第八、第九届高等学校科学研究优秀成果奖（人文社会科学）一等奖。

夏商文明与上古东亚海域的交往记忆

摘要

东夷族属系列在东亚地区的流动不居，给后世把握区域文化的传播谱系提供了线索，也制造了障碍。这种情况，在上古中朝、中日关系史上，表现得尤为突出。本讲座试图通过据实性假说，结合中韩古典中的箕子朝鲜说、日本近世获生徂徕的夏商古道说和当代古文字学家白川静的甲骨金文研究，粗略地爬梳这段鲜为人知的历史并尝试性地复原东夷文化的转徙流变轨迹。这对于深入了解中日文化的各自规定性及其不同走向，或有补益。



韓 東育 氏
(カン トウイク)

招致

東北師範大学で学士・修士、東京大学で博士号を取得。2008年、教育部「長江学者奨励計画」特聘教授に就任。研究分野は、日本史、東アジア思想史、東アジア国際関係史。著書に『「脱儒」から「脱巫」へ——日本近世以降における「脱中心化」の思想的過程』（2009）、『「請封」から「自封」へ——日本中世以降における「自己中心化」の行動過程』（2016）、『「道理」から「物理」へ——日本近世以降における「化道為術」の格致過程』（2020）など多数。その他、論文・国内外の研究プロジェクトの主宰など多数。教育部主催の「高等学校科学研究優秀成果賞（人文社会科学）」（第7回・第8回・第9回）において一等賞を受賞。

夏商文明と古代東アジア海域の交流の記憶

講演概要

東アジア地域における東夷の絶えざる移動は、後世における地域文化の伝播を把握するための手がかりとなると同時に、その大きな障害ともなっていた。このような状況は、古代の中朝関係史と中日関係史において、とりわけ顕著に現れている。本講演では、「事実性仮説」に基づき、中国・韓国の古典に見られる「箕子朝鮮」説、日本近世の荻生徂徠による「夏商古道」説、そして現代古文字学者・白川静の甲骨・金文研究を参照しながら、このあまり知られていない歴史の一端を概観し、東夷文化の移動と発展の軌跡を再構成することを目的とする。そしてこの試みは、東夷文化の研究だけでなく、中国文化と日本文化の規定性、およびその異なる発展の方向性を理解する上での一助ともなるだろう。



池平 纪子
(Noriko IKEHIRA)

1971年出生于大阪府；1999年大阪市立大学大学院文学研究科博士后期课程中国文学专攻修满学分退学；2002年获得文学博士学位；2016年任京都产业大学讲师；2020年任大阪府立大学副教授；2022年任大阪公立大学副教授；自2023年起任该大学国际基干教育机构·现代系统科学研究科教授。专业领域：中国中古思想史、三教（儒佛道）关系史。主要著作：池平纪子《中文撰述佛典研究的新展开：儒佛道三教的交涉》（临川书店，2025）；垣内智之、池平纪子《〈道藏辑要〉版本考》（《〈道藏辑要〉与明清时代的宗教文化》科研费报告书，麦谷邦夫主持，2012）；黎志添编《道藏辑要·提要》（香港中文大学出版社，2021）等。

大阪湾沿岸城市的福清籍华侨华裔的宗教文化传承与变迁

摘 要

日本自古以来深受中国文化的影响，而关于以沿海城市为通道的文化输入，其代表性事例可追溯至江户时代承应三年（1654年，即中国清顺治十一年），福州府福清籍的隐元隆琦禅师东渡长崎，弘扬临济宗佛法，随后迁至宇治创立黄檗山万福寺。这一历史进程凸显了福清出身的华侨、华裔群体在推动宗教文化传入与交流方面的重要作用。

本研究旨在以目前居住于大阪湾沿岸城市、具有福清渊源的华侨与华裔群体为研究对象，重点考察其宗教文化的传承与变迁。具体而言，研究将聚焦于神户市中央区关帝庙的运营者、前往参拜的群体，以及虽未直接参与关帝庙活动、却在更广泛意义上承担大阪湾沿岸地区祭祀与祭典事务的相关人士，通过对这些群体的考察，揭示其宗教文化的延续与变动。

具体而言，本研究将以关帝庙年度祭祀中最为盛大的“普度胜会”仪式为例，开展历时性与共时性的比较研究。同时，通过对上述具有福清渊源群体的访谈，考察其参与源自故乡的祖先祭祀及神佛祭祀的状况与认知，以及其参与大阪湾沿岸地区本地各类祭祀、祭典的情况与态度，并据此进行分析。

本研究旨在揭示近现代海域沿岸城市宗教文化交流的某些侧面，对于深化中日文化以及更广泛的东亚文化相互理解具有重要意义。



池平 紀子 氏

1971年大阪府生。1999年大阪市立大学大学院文学研究科後期博士課程中国文学専攻単位取得満期退学。2002年博士（文学）取得。2016年京都産業大学講師、2020年大阪府立大学准教授、2022年大阪公立大学准教授、2023年より同大学国際基幹教育機構・現代システム科学研究科教授。専門：中国中世思想史、三教交渉史。主な著作：池平紀子『中国撰述仏典研究の新展開：儒仏道三教の交渉』（臨川書店、2025）、垣内智之・池平紀子「道蔵輯要版本考」（『道蔵輯要』と明清時代の宗教文化）科研費報告書、麥谷邦夫代表、2012）、黎志添編『道蔵輯要・提要』（香港中文大学出版社、2021）等。

大阪湾沿岸都市在住の福清ルーツ華僑・華裔における 宗教文化の継承と変遷

講演概要

日本は古来、中国文化の影響を強く受けてきましたが、海城沿岸都市間をルートとする文化流入に関しては、江戸時代の承応三年（1654年、中国は清の順治11年）に隠元降琦禅師が福州府福清より長崎に至って臨濟禅を広め、その後、宇治に移って黄檗山万福寺を開いたのを代表として、福清出身の華僑・華裔の方々によってもたらされることが多くありました。

本研究の目的は、現在、大阪湾沿岸都市に居住する福清にルーツを持つ華僑・華裔の人々を対象とし、特に神戸関帝廟（神戸市中央区）の運営を担う方々、参拝をする方々、および現在は関帝廟の活動には参加していないものの、むしろより広く大阪湾沿岸部の祭祀・祭事を担っておられる方々の宗教文化の継承と変遷をみるものです。

具体的には、関帝廟の年間祭祀で最も盛大な「普度勝会」の儀礼について通時的・共時的な比較研究を行うと共に、上記のような福清ルーツの人々へのインタビューを通して、故郷由来の祖先祭祀や神仏祭祀への参加状況と意識、大阪湾沿岸部の当地由来の各種祭祀・祭事への参加状況と意識を調査・分析します。

本研究により、近現代における海城沿岸都市の宗教文化交流の一端が明らかとなり、それは日中文化・東アジア文化の相互理解に資するものと考えます。



王升远
(WANG SHENGYUAN)

上海交通大学外国语学院长聘教授、博士生导师,主要从事近现代中日文学文化关系研究以及战后日本文学史与思想史研究。近年来先后主持并完成国家社科基金重点课题、国家社科基金青年课题等多项,学术论文见于《外国文学评论》《外国文学研究》《中国比较文学》《读书》等刊;著有《文化殖民与都市空间:侵华战争时期日本文化人的“北平体验”》、《妥协与对抗:日本知识人的战时与战败》,译著有《近代日本的中国观》和《里斯本丸沉没》等。曾获吉林省社会科学优秀成果一等奖(两次)、上海市哲学社会科学优秀成果奖二等奖、宋庆龄基金会孙平化日本学学术奖、霍英东全国青年教师奖等奖项。

场内与场外,渲染与余白:《里斯本丸沉没》中战争记忆叙事之隐秘追求

摘要

《里斯本丸沉没》通过史料考证与个体记忆,重现了“二战”时期驻港英军战俘的苦难经历与生命轨迹。该作及其引发的创作、译介与讨论,为逼近历史的本真提供了可供参考的多方视角;而创作者之间“位置感”的差异,则在不同历史叙事间形成了不同文化语境下记忆的互补。托尼·班纳姆的书写呈现出记忆建构的主观性与“信以为真”的历史选择,揭示了历史叙事在冷静记录与“同情之理解”间的两难。在讲述个体生命故事的同时,该作也指向对战争制度性暴力的深层反思,让那些曾被淹没的战争记忆得以复原,成为理解战争与人性的重要思想资源。



王昇遠氏
(オウ ショウエン)

上海交通大学外国語学院教授。主な研究分野は、近現代の中日文学・文化の関係、および戦後日本文学史・思想史研究。近年は、「国家社会科学基金重点課題」「国家社会科学基金青年課題」など複数の研究プロジェクトを主宰。『外国文学評論』『外国文学研究』『中国比較文学』『読書』などの学術誌に多数の論文を寄稿。著書に『文化植民と都市空間——侵華戦争期における日本文化人の「北平体験」』（2017）『妥協と対抗——日本知識人の戦時と敗戦』（2025）など。訳書に『近代日本の中国観』（2020）『リスボン丸沈没』（2025）などがある。「吉林省社会科学優秀成果賞」（一等賞・2回）、「上海市哲学社会科学優秀成果賞」（二等賞）「宋慶齡基金会孫平化日本学学術賞」「霍英東全国青年教師賞」などを受賞。

内と外、「渲染」と余白：

『リスボン丸沈没』における戦争記憶のナラティブに潜む潜在的志向

講演概要

トニー・バンナムの著書『リスボン丸沈没』は、歴史的な資料の検証と個人の記憶とを行き来しつつ、第二次世界大戦下の香港に駐留した英国軍捕虜たちの苦難の経験と人生の軌跡を鮮明に描き出している。同書およびそこから触発された一連の創作、翻訳、そして議論は、歴史の真実に迫るための複数の視角を提供しており、かつそこでの創作者たちの「立ち位置」の違いが、異なる文化的文脈における記憶の補完関係を形作っていると言える。そのなかで、バンナムの叙述は、記憶の形成過程における主観性と「真実らしさ」への選択を浮き彫りにし、冷静な記録と「共感的理解」の狭間で揺れ動く、歴史叙述の本質的ジレンマを露わにしているのである。そのため本書は、一つ一つの生命の物語を丁寧に紡ぐとともに、戦争という制度的暴力そのものへの深い省察へと読者を誘うだろう。こうして、その叙述は、忘却の危機にあった戦争の記憶を甦らせると同時に、戦争と人間性を理解する上で、かけがえのない思想的財産として立ち現れてくるのである。

分科会专题研讨

(11月1日 15:00-18:00)

分论坛 1: 东亚海滨城市中的历史记忆与文化遗产

(地点: 外国语学院 2 楼 208)

主持人: 陈晓隽 (福州大学外国语学院 副教授)

序号	发言人	单位及职务	题目
1	戴琳剑	北京外国语大学 讲师	朝鲜半岛泰安郡安兴梁的海洋文化记忆与传承
2	郑松波	福清黄檗文化促进会 副会长	《世界记忆名录》中的“过所”： 中日文化交流的千年见证
3	李奕峰	中国船政文化博物馆 助理馆员	从福州到横须贺：近代法国技术引入下的 东亚军港选择与文明转译
4	王黛茜	闽江师范高等专科学校 助教	东亚海滨城市海女的生计、记忆与互鉴
5	李乾熠	福建师范大学文学院 博士研究生	作为语境的海洋 ——重新理解沈从文的青岛经验
6	范倩彤	大阪公立大学 博士研究生	中国東北地域における媽祖信仰の変容 ——遼寧省大連市碧海観を例として

分论坛 2：东亚海滨城市之间的文明互鉴与知识流动

（地点：外国语学院 2 楼 210）

主持人：徐冬梅（福州大学外国语学院 副教授）

序号	发言人	单位及职务	题目
1	李振政	安徽师范大学 讲师	19 世纪末的上海-仁川连线： “新兴城市”间的印刷品流通与文化映照
2	陈思建	福州外语外贸学院 副教授	东亚“学者社会”的先型： 朝鲜燕行使朴齐家与金石书画收藏
3	丸山雅美	福州外语外贸学院 常勤教师	空海入唐与其影响
4	徐悦超	东北师范大学 历史文化学院讲师	“物伦”的兴起： 戊戌变法前后“商学”的形成
5	朱红军	鲁东大学区域国别学院 讲师	东亚赤山明神的文化交涉与互动
6	王士栋	浙江大学马克思主义学院 硕士研究生	东亚海滨城市文明互鉴的 历史模式类型学研究
7	徐冬梅	福州大学外国语学院 副教授	国民国家概念形成与新世界史观的构想

分论坛 3：东亚海滨城市中的移民社群与文化认同 (地点：外国语学院 2 楼 211)

主持人：吴格非（中国矿业大学 教授）

序号	发言人	单位及职务	题目
1	梁新娟	集美大学日语系 副主任	江户时代以唐通事为媒介的 中日文人诗歌唱和研究
2	郑训焄	厦门大学嘉庚学院 日本语言与文化学院本科生 福清黄檗文化促进会理事	长崎：旅日华侨发祥地与中日文化交融的见证
3	林 静	厦门理工学院 讲师	从盛唐到安南： 李白豪放诗风在越南的接受与流变
4	陈宇帆	厦门大学 博士研究生	民国时期迁居厦门的海澄县滨海人群
5	赵泳晴	浙江大学马克思主义学院 硕士研究生	东亚海滨移民社群聚居区的空间生产与变迁 ——基于中国福建、日本大阪、韩国釜山的比较研究
6	王 竣	厦门大学 硕士研究生	“泼出去的水”：在桂越南新娘群体的 社交媒体社群与社会身份认同
7	王雅慧	福州大学外国语学院 讲师	闽南方言及家庭教育在东南亚的传播 对闽南身份构建的影响

分论坛 4：东亚海滨城市在全球化进程中的角色与挑战

(地点：外国语学院 3 楼 306)

主持人：金玉花（福州大学外国语学院 副教授）

序号	发言人	单位及职务	题目
1	谭 雁	玉林师范学院商学院 副教授/院长助理	面向 RCEP 的北部湾蓝色经济 ——规则对接、项目落地与风险应对
2	邹圣杰	厦门大学嘉庚学院 讲师	多文化共生都市構築の視座における 静岡県浜松市の国際理解教育の実践と課題
3	惠 科	四川外国语大学 副教授	近代重庆与上海城市发展的比较考察 ——以经济视角为中心
4	李 宁	吕梁学院历史文化系 副教授	逆全球化背景下亚当·斯密分工理论视阈中的 上海临港产业链研究
5	李 兰	成都理工大学外国语学院 硕士研究生	基于数字叙事的日语语块教学实践研究 ——以东亚海滨城市为中心
6	方可欣	福州大学外国语学院 日语系本科生	《人民网日语版》的福建形象建构研究
7	黑冈佳柁	福州大学外国语学院 副教授	海に定位した生と他者の歓待 ——カール・シュミット、折口信夫、ジャック・デリダ

分论坛 5：东亚海滨城市的城市叙事与国际传播

(地点：外国语学院 3 楼 309)

主持人：黄彩霞（潍坊学院外国语学院 教授）

序号	发言人	单位及职务	题目
1	李亚伟	四川轻化工大学 讲师	基于抗逆力视角下韩国新安郡紫色岛发展研究
2	林宇轩	福建师范大学 世界史硕士研究生	野上英一《福州考》与近代日本人的福州观
3	陈怡伶	北京外国语大学 国际中国文化研究院 硕士研究生	19 世纪哥伦比亚旅行家阿尔梅罗的 中国海滨城市叙事
4	谭肖雄	天津大学 冯骥才文学艺术研究院 硕士研究生	城乡博弈：后传承时代新南方民俗共同体的嬗变 ——以《潮汐图》《北流》为叙述中心
5	关宜平	厦门理工学院外国语学院 讲师	佐藤春夫厦门书写的身份困境及其审美超越
6	张泽英	四川大学文学与新闻学院 硕士研究生	旅大地区的苏联形象塑造与接纳(1945-1949) ——以《民主青年》《友谊》刊物为中心
7	连小裕	厦门理工学院外国语学院 讲师	短视频媒介视角下 闽茶文化跨文化传播效果与策略研究

分论坛 6：东亚海滨城市的建筑符号与遗产保护

(地点：外国语学院 3 楼 310)

主持人：蔺静（天津外国语大学日语学院 副教授）

序号	发言人	单位及职务	题目
1	韩 晗	武汉大学 景园规划设计研究院 副院长	以水为媒：东亚海滨城市形成背景下的 滨海工业遗产历史价值及保护背景研究
2	卢佳琦	上海外国语大学 讲师	中国澳门历史城区的文化密码 ——世界遗产地的保护实践与路径
3	李承纪	沧州师范学院 教师	潮声里的文明印记： 东亚海滨城市的建筑人文与文化遗产
4	董素芬	厦门理工学院外国语学院 副教授	海丝文化视域下厦门传统民居的 建筑符号解析与当代适应性研究
5	张海玲	厦门理工学院外国语学院 讲师	多元文化共生下的厦门建筑遗产保护策略研究 ——以鼓浪屿与集美学村为例
6	陈文佳	华中师范大学 中国工业文化研究中心 博士研究生	论福建船政工业遗产与福州海滨城市文化的 建构及再生

分论坛 7：东亚海滨城市的文学与思想史研究

(地点：外国语学院 4 楼 404)

主持人：杜志卿（华侨大学外国语学院 教授）

序号	发言人	单位及职务	题目
1	邵海伦	福建师范大学 助理研究员	献给革命遗族的“花环” ——尾崎秀树的鲁迅研究及其生命实践
2	惠子函	中国传媒大学人文学院 博士研究生	“隐元豆”与“朱子学”： 物与思想在福州—长崎航线上的双向流动
3	张维天	中国传媒大学 硕士研究生	芥川龙之介《他之二》中的东京与上海城市镜像
4	马婉清	西藏民族大学 硕士研究生	创伤的互鉴： 《将军族》中的身体媒介与东亚港城的记忆流动
5	陈雪咪	湖北师范大学 历史文化学院硕士研究生	东亚海滨城市思想史研究与文化传承机制
6	杨金颖 (线上参加)	东北师范大学文学院 硕士研究生	海滨文明的文学回声 ——论石牟礼道子《苦海净土》三部曲中的 “道子体”与知识流动

分论坛 8：东亚海滨城市的历史记忆与区域互动

(地点：外国语学院 4 楼 408)

主持人：任江辉（集美大学外国语学院 日语系主任、教授）

序号	发言人	单位及职务	题目
1	徐文彬	闽江学院历史系 教授	海上丝绸之路与福厦城市格局变迁
2	任江辉	集美大学外国语学院 日语系主任、教授	长崎华人宗教信仰的历史流变与社会功能探究
3	王爱红	潍坊学院 副教授	潍县集中营的中外文学书写 与二战潍坊形象构建
4	李博强	福建师范大学 社会历史学院博士后	沟通内外与商品中转： 清末民初时期汕头的对外贸易研究 ——基于日本驻汕头领事报告的调查数据
5	唐林洁	澳门大学人文学院 硕士研究生	西学东渐与地方回应： 新教传教士与福建口岸城市的社会转型（1840-1900）
6	沙骏雅	陕西师范大学历史文化学院 硕士研究生	外来之眼与本土之城： 唐代福州的文化交融与城市形象
7	池泽充弘	福州大学外国语学院 日语专业外籍教师	ポール・クローデル『東方所感』における 樹木と都市の表象

分论坛 9：东亚海滨城市的建筑人文与城乡规划

(地点：外国语学院 4 楼 410)

主持人：秋原雅人（福州大学建筑与城乡规划学院 教授）

序号	发言人	单位及职务	题目
1	中野茂夫	大阪公立大学教授	新産業都市と工業整備特別地域の緩衝緑地帯について
2	湯澤晶子 金盼盼	东京大学大学院 都市工学特任研究员	变与不变之间： 宁波旧城区形态与地方记忆的历史叙事
3	藤川昌樹 刘一辰	宫崎大学副教授	1945 年前后的天津城市规划的连续性
4	尾高真輝 金雄杰	早稻田大学博士研究生	東アジア沿岸の禅院にみる清規と伽藍関係 ——僧侶の修行生活動線による分析
5	Kim JoonYoung	大阪公立大学博士研究生	大都市周辺地域の郊外住宅地化にともなう、 在来集落の空間的变化について
6	秋葉正美 吕梦琦	筑波大学博士研究生	(参与线上讨论)
7	北條英次 杨佳乐	筑波大学博士研究生	(参与线上讨论)
8	渡邊唯斗 张宇星	筑波大学硕士	(参与线上讨论)
9	戸崎景太 宋宇辰	筑波大学博士研究生	(参与线上讨论)
10	宮下哲禎 吴林蔓	筑波大学硕士	(参与线上讨论)
11	松下大輔 郝哲涵	大阪公立大学博士研究生	(参与线上讨论)
12	小伊藤亜希子 戚丽明	大阪公立大学博士研究生	(参与线上讨论)
13	酒井英樹 李庆贺	大阪公立大学博士研究生	(参与线上讨论)
14	岡本滋史 王龙飞	大阪公立大学博士研究生	(参与线上讨论)
15	小池志保子 李菲然	大阪公立大学硕士	(参与线上讨论)
16	瀧澤重志 李阜阳	大阪公立大学博士研究生	(参与线上讨论)
17	上田博之 邢 烁	大阪公立大学硕士	(参与线上讨论)
18	関根萌恵 焦媛媛	新泻大学硕士	(参与线上讨论)
19	金山涼太郎 邵 帅	法政大学助手	(参与线上讨论)
20	曾我陽大 余鹏正	法政大学博士研究生	(参与线上讨论)
21	長田巴菜子 唐婧雯	法政大学硕士	(参与线上讨论)
22	真野洋介 金 欣	东京科学大学硕士	(参与线上讨论)

发言摘要（按发言顺序）

分论坛 1：东亚海滨城市中的历史记忆与文化遗产

朝鲜半岛泰安郡安兴梁的海洋文化记忆与传承

戴琳剑（北京外国语大学 讲师）

朝鲜半岛泰安郡安兴梁海域自古以来既是国内海路交通要道，又是海上对外交流的重要窗口。作为海路要道，安兴梁在漕运、海防、海难救助、海疆认知等方面持续积累历史经验并转化为地方文化，朝鲜时期以安兴镇和“城中村”为中心形成港口军镇。作为对外交流窗口，安兴在统一新罗时代作为渡海僧的出海口，在高丽时期作为宋代使臣的接待处，在朝鲜时期作为中国乃至西方船只的船难多发地之一，以上特点使得安兴成为东亚海域当中实现贸易往来、宗教交融、异文化碰撞的典型地区。今天位于该地址的韩国程竹里正是以安兴的历史记忆为支点，形成了相对集中的海洋文化空间。传承安兴海洋文化、挖掘安兴与东亚其他港口城市的联系，对于再现东亚海域独特人文交流网络和文明互鉴记忆而言具有重要意义。

《世界记忆名录》中的“过所”：中日文化交流的千年见证

郑松波（福清黄檗文化促进会 副会长）

本文围绕 2023 年列入《世界记忆名录》的日本僧人圆珍入唐求法 56 件文献展开，聚焦其中全球仅存的唐朝“过所”原件，揭示其历史价值与中日交流意义。圆珍于 853 年入唐求法，获越州都督府、尚书省司门签发的两份“过所”，作为通关凭证遍历多地，携千余卷经书返日，是“入唐八家”中携经最多者。其入唐时，在福州等地获公验，印证福清海口为唐代海上丝路重要门户。返日后，圆珍创立天台宗寺门派，相关奏章、经书目录等亦成珍贵文献。这些文物不仅是唐朝交通制度的实证，更见证了中日在宗教、制度、文化等领域的深度交融。

从福州到横须贺：近代法国技术引入下的东亚军港选择与文明转译

李奕峰（中国船政文化博物馆 助理馆员）

19世纪中期，法国海军技术体系先后影响了中国福建船政局与日本横须贺造船所的建设与选址，成为东亚近代化的重要技术源头。本文以“福州—横须贺”两地为例，从军港与船坞建设的环境要求入手，考察近代东亚国家在引入法国海军工程理念后的技术转译与在地化过程。研究发现，马尾与横须贺的地形水势、潮汐条件及港湾结构皆体现出法国船坞设计标准的适应与再创造，而选址背后更折射出不同政治体制下的战略考量与文明认知。福州船政的建立标志着中法合作下的近代工业起步，而横须贺则在吸收同源技术后实现了制度化、国家化的重塑。本文认为，军港的空间选择不仅是一种技术行为，更是自然环境、国家战略与文明理念交织下的历史产物，揭示了东亚在近代化浪潮中由“引进”到“自立”的文明转译路径。

东亚海滨城市海女的生计、记忆与互鉴

王黛茜（闽江师范高等专科学校 助教）

东亚三国都有一个正在消逝的职业——海女（渔女）。海女兼具生计、女性、文化三重内涵，属于活态非遗文化。它呈现了东亚三国在生计技巧、组织形态、信仰崇拜上的共性和特性，是海洋文明的重要组成部分。当这个生计逐渐消失，附着于其上的社会记忆与活态文化应该如何保存？本报告以中国福建省渔女、日本三重县海女、韩国济州岛海女为案例，以国家、市场与公民社会的理论视角，剖析三个海滨地区文化保存方式不同的原因，探讨应该如何更好地传承海女文化。根据分析，日本使用商品化和体验化策略，将海女文化转化为经济效益，也展示了生计技巧，但远离了其海洋生活的本质。韩国则使用政治化和权力化策略，将海女从客体转化为主体，形成独特文化，但因其对抗性较难形成经济效益。而中国的渔女文化主要由政府主导进行系统性的记录和保存，并通过符号化与景观化策略将渔女的服饰和形象展露，展现其“美”的价值，从而高效吸引社会的注意力和资源，但渔女作为劳动者的“生计”内核则被相对弱化。这启示着中国未来的渔女文化保存需要从“视觉符号”的浅层，走向“个体、生计与社群”的深层。

作为语境的海洋——重新理解沈从文的青岛经验

李乾熠（福建师范大学文学院 博士研究生）

关于沈从文青岛时期的创作，现有研究基本局限于作家主体的私人经验。现代港口经济、崂山自然风光、气象大会召开与海滨生活交际是沈从文发现并激活海洋想象的现实图景。海洋语境构成了《凤子》《边城》《月下小景》《八骏图》等作品的情感转换的媒介与形式创造的装置，它们也的确代表了沈从文的主要文学实绩。问题在于，1930年代初的沈从文未自觉意识到青岛的海洋首先是真实的“历史”，而将之构造成一个稳定且完整的“非现实环境”，一旦身处1940年代的战争语境，主体无法重组具体、破碎的事实，文本诗性所掩抑的形式的抽象本质将注定暴露。沈从文的青岛经验及其实践的限度，提示当下海洋文学的创作不能自封于自我的精神谱系，而有必要站在人类命运共同体的高度，理解海洋在建构文化诗学、人与自然和谐共生等方面的现实意义。

中国東北地域における媽祖信仰の変容 —遼寧省大連市碧海観を例として—

范倩彤（大阪公立大学 博士研究生）

媽祖は、「天后」や「天上聖母」などとも呼ばれ、その神格や職能は、はじめの航海や漁業を守護する「海洋の守護神」というイメージから、次第に安全祈願や災難除けなどの多様な職能を持つ女神の姿へと発展してきた。媽祖信仰は、東アジア沿海部における重要な民間信仰であり、現在も特に福建省・広東省・浙江省などの南方地域を中心として盛んである。そして、各地域の文化交流や海洋貿易の発展に伴い、その信仰は広域に伝播したのである。例えば、中国東北地区における代表的な沿岸都市である遼寧省の大連市においても、媽祖信仰が存在する。

しかし、南方海洋文化の背景を持つ媽祖信仰と比べると、東北地域における媽祖信仰は、東北の土着的信仰の影響を受け、独自の変容を遂げている。本研究では、遼寧省大連市の「碧海観」を調査対象とし、東北地域に伝わった媽祖信仰の変容について考察することを目的とする。

分论坛 2：东亚海滨城市之间的文明互鉴与知识流动

19 世纪末的上海-仁川连线：“新兴城市”间的印刷品流通与文化映照

李振政（安徽师范大学 讲师）

19 世纪末，上海与仁川作为东亚海滨城市，成为文明互鉴与知识流动的核心枢纽。本研究聚焦沪仁航线联结下，上海印刷业对朝鲜文化艺术的跨域影响，揭示海滨城市驱动的商业化知识流动新范式。

上海依托通商优势，率先实现西方印刷技术本土化：美华书馆电镀活字解决中西文混排难题，点石斋石印技术推动图文大规模复制，《申报》及《点石斋画报》构建大众导向的印刷产业，使印刷品从精英载体变为可批量传播的文化商品。1883 年仁川开埠后，沪仁轮船航线取代传统漕运，清租界强化两地联结，仁川成为朝鲜承接中国文化的海滨门户。

流入朝鲜的印刷品含多元知识：《三才图会》提供百科式图文参考，《芥子园画谱》传播程式化绘画技法，清代绣像小说提供创作素材；研究澄清《洪氏仙佛奇踵》为道教文本，其仙人图像因民间信仰交融被纳入朝鲜宗教艺术认知。这些印刷品未复兴朝鲜“崇儒排佛”背景下的佛教艺术，而是以“世俗化渗透”融入民画，如“册架图”借鉴《三才图会》符号，技法吸收《芥子园画谱》范式。

沪仁互动打破传统朝贡体系的官方文化传播模式，构建海滨城市主导的商业文化流动路径，印证东亚海滨城市在全球化中的文明互鉴桥梁角色，为理解区域文化联动提供实证。

东亚“学者社会”的先型：朝鲜燕行使朴齐家与金石书画收藏

陈思建（福州外语外贸学院 副教授）

朝鲜“北学派”重要学者朴齐家，曾四度燕行来华，其间与清朝朝野士人交游笔谈，朴氏归国后，仍频传鱼雁。朴齐家的金石书画藏品，经朴氏季子朴长醮详加著录于《缙绅集》，今见辑《楚亭全书》。这些文物先流传海东，后辗转易主于日本汉学家藤塚邻“望汉庐”，今藏哈佛燕京学社图书馆，近年又有部分藏品回流禹域。通过文献与实物，域外学人以各种方式，参加、并建构东亚“学者社会”，更激活了东亚“学者社会”的历史记忆。今据《缙绅集》重构朴齐家与纪昀、翁方纲等交游网络，发现朝鲜“北学派”借燕行路径，把清代考据学带回汉城，又经藤塚邻在日本传抄，形成跨国“知识环流”，提示我们“学术东亚”并非想象，而是可由文献与实物反复激活、持续生成的对话场。

空海入唐与其影响

丸山雅美（福州外语外贸学院 常勤教师）

空海が唐に入国してから学んだ知識や文化は約1200年を超えた現代まで日本社会に多大な影響をもたらした。翻って中国では空海の足跡ほどのような影響を与えたのだろうか。参加者の知見と共に考察したい。

“物伦”的兴起：戊戌变法前后“商学”的形成

徐悦超（东北师范大学历史文化学院 讲师）

甲午战后，旨在“造物以养人”的“物伦”渐被视为国家“富强”的意义所在。这一思想动向冲击着传统中国长久以来“载道以养人”的价值理念。原本自在于民间的货物懋迁，彼时已被纳入举国聚焦的“整顿商务”当中，如何使“物”在贸易中以尽其“用”，需要“商学”给予知识上的研判。“商学”的概念已于甲午前在上海纸媒的报道中开启，它大抵被描述为一门以算学为门径，围绕货物展开的金融、制造与交通共同运筹的新学。稍后的湖南新政对于“商学”中造物与售物的研讨又成为“广励工商”的学术表达，并牵引出“中体西用”与不分中西的学理紧张。在戊戌变法的具体设计中，康有为与梁启超对于“商学”的体认分别侧重于“政”与“学”。前者旨在由“商学”规划“商局”以统驭“商物”，后者则试图以“商学”化“博物”于“专门”。晚清以来，对于“物”在知识上不断深研的“商学”，实已被放入一种追求“纤悉之治”的“规划社会”当中。

东亚赤山明神的文化交涉与互动

朱红军（鲁东大学区域国别学院 讲师）

赤山明神信仰作为东亚佛教史与民间宗教史中的独特现象，其文化交涉过程深刻反映了民间信仰如何在东亚不同社会中被吸收、重构与功能化。以“文化选择—叙事重构—功能整合”的分析框架，系统探讨了赤山明神传入到东亚各地逐渐完成神格定型的全过程。赤山明神最初以外来冥神的身份进入日本和韩国宗教体系，逐步被叙事化地重构为护法神，并通过仪式实践、世俗功德与修行验证实现功能整合。在这一过程中，其神格从主宰冥界的泰山府君属性，扩展为兼具护法、延寿、商业与福德等多重职能的复合性神祇，最终成为都市宗教民俗与天台修行体系的核心组成部分。研究不仅揭示了赤山明神信仰在日本完成在地化的内在逻辑，也为理解东亚宗教文化交流中的外来神祇接受机制提供了新的视角与案例。

东亚海滨城市文明互鉴的历史模式类型学研究

王士栋（浙江大学马克思主义学院 硕士研究生）

东亚海滨城市自古以来便是跨文化交流的枢纽，其文明互鉴的历史进程呈现出复杂多样的模式。基于对现有文献和考古资料的梳理，东亚海滨城市的文明互鉴历史模式可被归纳为三种主要类型：“贸易主导的融合型”、“政治中心主导的辐射型”以及“移民社群主导的嵌入型”。“贸易主导的融合型”以宋元时期的泉州为典型，该模式下经济活动是主要驱动力，外来文明元素（如宗教、艺术、技术）与本土文化在城市空间中长期共存并深度融合，形成了“蓝色儒家文明”等创新形态。“政治中心主导的辐射型”则体现在古代如长崎等作为特定“窗口”的城市，其文化交流受到中央政权的严格规制，呈现出选择性、非对称性的特点。“移民社群主导的嵌入型”模式常见于东南亚的马六甲、格里斯克等港口城市，华商、穆斯林商人等移民社群在城市中形成相对独立的文化聚落，通过商业网络和宗教信仰将母体文明嵌入当地社会，促进了区域性的文化多样性。通过对这些模式进行比较分析，不仅可以揭示不同历史时期和不同地缘政治格局下文明互鉴的动力机制与表现形态，也能够为理解当代全球化背景下城市文化互动的复杂性提供深刻的历史洞见。

国民国家概念形成与新世界史观的构想

徐冬梅（福州大学外国语学院 副教授）

“国民国家”是近代世界政治与历史叙述的核心范式。自18世纪起构成现代主权与公民身份的制度基础。其形成始于法国大革命以“人民主权”重构国家权力，后通过语言、文化等要素整合群体身份认同，使国家成为世界史叙述的基本单元。

然而，在全球化深度推进的时代背景下，这一以国界为边界的叙事范式逐渐显露出局限性，难以有效解释文化流动、经济联动等跨越国界的全球现象。据此，日本学者羽田正提出“新世界史观构想”，倡导打破欧洲中心主义的历史框架，基于全球历史的关联性与人类共通性构建新的世界史框架。

本研究以国民国家概念形成的历史逻辑为起点，引入羽田正的“新世界史观”构想，探讨“国家化的历史”走向“关联化的历史”这一范式演变中，国民国家与全球历史观之间的内在张力与互补关系。旨在揭示国民国家的建构本质与内在局限，也为全球化时代的文化认同研究提供新的理论视角。

分论坛 3：东亚海滨城市中的移民社群与文化认同

江户时代以唐通事为媒介的中日文人诗歌唱和研究

梁新娟（集美大学日语系 副主任）

以江户时代唐通事媒介下的中日文人诗歌唱和为研究对象，总体框架包括：唐通事的媒介职能与诗歌唱和的关联，如联络沟通、语言转换、文化调适等；中日文人唱和的主要场景及唐通事的参与方式，如商馆应酬、私人交往、文化集会等；典型唱和文本如《清槎唱和》《萍寄唱和》《自远录》等中唐通事的痕迹考辨；唐通事媒介作用对唱和诗歌主题、风格及文化内涵的影响。

长崎：旅日华侨发祥地与中日文化交融的见证

郑训焘（福清黄檗文化促进会 理事）

本文聚焦日本长崎这一旅日华侨发祥地，阐述其承载的深厚中日文化交融史。长崎作为日本距中国最近之地，留存大量中国文化遗存，如新地中华街、“唐人屋敷”，以及兴福寺、崇福寺等“四大唐寺”。

1893年建成的长崎孔庙，由华侨跨越乡帮共建，1988年注册为中国资产，二战后经福清籍侨领导主导复建，是中华文化地标。长崎杂拌面由福清华侨陈平顺创制，见证侨民谋生史，成为当地特色美食。此外，以眼镜桥为代表的石桥群多由中国僧人、福清籍侨民设计建造，隐元禅师等黄檗文化代表东渡日本，推动建筑、音乐、宗教等领域交流。长崎的文化遗存，是中日友好与文明互鉴的生动见证。

从盛唐到安南：李白豪放诗风在越南的接受与流变

林静（厦门理工学院 讲师）

李白的豪放诗风作为盛唐诗歌的典范，经由传播与阅读，深刻融入了越南文学。在越南历代诗文创作中，明显存有李白的痕迹，越南文人在创作过程中也形成了具有自身传统特色的在地化风格。本文以邓陈琨、阮攸、高伯适等诗人的作品为分析对象探究越南文人在李白的接受过程中，既保留了形式、意象与风格上的模仿，又因本土历史语境（战乱、殖民压迫）对其精神内核进行重构——李白的个人狂放被转化为集体苦难的抒写，豪迈诗风亦融入沉郁悲愤的现实批判。这一变异体现了儒家诗教、道家谪仙与越南民族主义的调和，以及汉文化在跨域传播中的适应性创新。

民国时期迁居厦门的海澄县滨海人群

陈宇帆（厦门大学 博士研究生）

明清与近代以来，厦门港兴起，大量厦漳泉地区的民众移居厦门，或经常往来厦门。其中与厦门隔海相望的海澄县（今龙海市的一部分）有大量滨海人群如渔民和船员迁居或短住在厦门港与鼓浪屿，甚至有在遇到灾害战乱时大半个村子都移民到厦门的情形。本文通过档案、报刊和田野调查，对这一现象进行了初步的研究。

东亚海滨移民社群聚居区的空间生产与变迁 ——基于中国福建、日本大阪、韩国釜山的比较研究

赵泳晴（浙江大学马克思主义学院 硕士研究生）

亨利·勒菲弗的“空间生产”理论揭示了空间是社会权力关系的产物与战场。运用此理论模型，可对中国福建、日本大阪与韩国釜山三地移民社群的空间变迁展开比较分析。通过比较可以发现，资本、权力与地方性知识的互动，共同塑造了三种不同的空间形态与认同路径。福州案例呈现发展主义与全球化资本合力下的“创造性破坏”，原有社会关系网络面临重构；大阪案例体现国家力量、地方政府与社区组织在历史聚居区中的长期博弈，治理张力显著；釜山案例则展示了艺术介入与旅游开发如何将边缘社区转化为文化地标，但这一过程也伴随着士绅化与文化认同的商品化风险。本研究将马克思主义政治经济学批判具体化为“空间生产”的分析路径，并在东亚比较视野下，揭示城市更新中“空间正义”问题的复杂面向，从而为促进东亚海滨城市的包容性发展提供理论参照。

“泼出去的水”：在桂越南新娘群体的社交媒体社群与社会身份认同

王竣（厦门大学 硕士研究生）

自中越两国恢复正常的邦交关系以来，越来越多的越南女性选择跨国婚姻，远嫁中国，成为人们所称的“越南新娘”，其中有着地缘、语言优势的广西省，便成了越南新娘的“流动的幻想朝觐地”。这些不断流动与定居的移民群体吸引了学术界的广泛关注，而针对越南新娘的诸多研究，大多着重于文化认同、族群、经济等议题上。只有少数研究探讨了其媒介使用现象。而考察发现，跨国婚姻中的越南女性处在越南社会和异国社会的边界，在两边都难以获得国家认同和族群认同，身陷“双重污名沼泽”。这些探索揭示了家庭、媒体、国家和民间社会对越南新娘的形象构建与认同之间的脱节。然而，文章展示了当其基于东道国与母国身份的交汇而面临障碍时，越南新娘如何通过身份撕裂影响其跨文化适应，并借助媒介消解认知偏差、重构主体性。

闽南方言及家庭教育里在东南亚的传播对闽南身份构建的影响

王雅慧（福州大学外国语学院 讲师）

随着闽南族群在东南亚地区的迁徙式发展的流动，其方言和家庭教育也随着流动。本研究着重对东亚海滨相关的城市进行区域研究，文献研究，旨在发现闽南方言在历史上，现实上所带来的家庭，社会，教育上的影响。

るははの聖母の聖母市泰小共外文を
認察と對定の育導研年産國の市感述果同論

（師付 紹華夷漢考大門類） 杰柔羅

分论坛 4：东亚海滨城市在全球化进程中的角色与挑战

面向 RCEP 的北部湾蓝色经济——规则对接、项目落地与风险应对

谭雁（玉林师范学院商学院 副教授、院长助理）

面向 RCEP 的北部湾蓝色经济——规则对接、项目落地与风险应对 东盟《蓝色经济框架》作为推动区域海洋可持续发展的战略性文件，构建了以跨部门协同为核心、以价值链升级和包容性增长为目标的蓝色经济发展模式。该框架秉持价值创造、包容性及可持续性原则，重点涵盖渔业水产、绿色航运、海洋旅游、可再生能源与生物技术五大领域，并通过基础设施、制度体系、能力建设和可持续金融四大支柱推进实施。这一区域议程与中国“一带一路”倡议下共建蓝色经济伙伴关系的方向高度契合。本文将框架置于中国—东盟 RCEP 一体化合作背景下，以广西和北部湾地区为实践场景，聚焦政策协同与项目示范两条路径，探索构建可操作、可评估的合作机制，为深化区域蓝色经济合作提供实施参考。

多文化共生都市構築の視座における 静岡県浜松市の国際理解教育の実践と課題

邹圣杰（厦门大学嘉庚学院 讲师）

静岡県浜松市は、太平洋に面した重要な港湾都市であり、戦後、本田技研工業やヤマハなどの企業を中核とする産業都市として発展してきた。工業化の進展に伴い労働力需要が拡大する中、日系ブラジル人を中心とした外国人の移住が顕著となり、2025年10月の時点で、外国人住民が30,892人に達し、独自の多文化都市としての性格を強めている。同市は「多文化共生都市ビジョン」を掲げ、文化的多様性を都市計画、地域コミュニティ形成、公共サービスに体系的に組み込むことで、「行政主導・地域連携・教育支援」の三位一体の推進モデルを構築している。本論文では、学校教育と社会教育の二つを柱として、同市における国際理解教育の実践を分析し、今後の課題について考察する。学校教育面では、浜松学院中学校を事例として、同校の社会科授業の単元設計において、多文化都市構築をテーマに展開する国際理解教育の実践内容を分析し、「多様性の尊重」と「社会正義の実現」という国際理解教育の目標の実現可能性を検討する。社会教育面では、二つの NGO 機関が実施する、市民の国際理解教育リテラシー向上を目指す活動を分析対象とし、多文化共生環境において不可欠な「マジョリティの意識変容」という課題の重要性を浮き彫りにする。

近代重庆与上海城市发展的比较考察——以经济视角为中心

惠科（四川外国语大学 副教授）

重庆与上海作为近代长江流域东西两端的关键城市，19世纪中后期发展呈现出“先似后异”特征。开埠前，两城均凭地理区位形成商贸功能，以传统商业为核心，行政地位与规模相近，路径相似。开埠后，二者特别是在经济发展上呈现显著分化。上海凭借对外贸易扩张、近代工业兴起及金融航运等现代业态形成，成为全国经济中心。重庆则在贸易规模、工业发展及现代经济体系构建上明显滞后。探究差异的成因，西方人在上海建立的租界带来的制度与技术示范效是重要推手。此外，地方对西方事物的接纳，进一步加速了其近代化进程。而存在于重庆的租界示范效应极其有限，仅有的通商口岸区域未能形成规模性影响。加之地方社会对外部冲击的接纳度较低，且西南经济基础薄弱、资源集聚能力不足，最终导致两城近代化进程悬殊。

逆全球化背景下亚当·斯密分工理论视阈中的上海临港产业链研究

赵佳丽（吕梁学院历史文化系 助教）

李宁（吕梁学院历史文化系 副教授）

本研究聚焦于逆全球化背景下，从亚当·斯密分工理论的视阈剖析上海临港产业链。上海临港新片区已形成集成电路、人工智能、生物医药等诸多特色产业集群。在逆全球化形势下，依据亚当·斯密分工理论，临港产业链内部各产业仍保持精细分工态势。如集成电路产业，从芯片设计到封测等环节，不同企业在细分领域深耕，通过提升劳动者熟练程度、节省工作转换时间等方式提高生产效率，且持续投入研发促进技术创新，以增强自身竞争力。区域间，临港与上海其他区域及长三角地区虽面临逆全球化挑战，但依然维系着分工协同关系。临港利用自身区位与政策优势重点发展高端制造业等，其他区域凭借金融、贸易等优势与之互补，实现资源优化配置。同时，临港产业链通过分工吸引专业人才聚集，推动知识交流与技术扩散。而且，在逆全球化冲击下，临港产业链依托国内庞大市场，以分工深化满足多样化需求，进一步拓展市场空间，提升产业整体抗风险能力。总之，亚当·斯密分工理论在逆全球化背景下的上海临港产业链发展中仍具重要指导意义，助力其持续发展与优化升级。

关键词：逆全球化；亚当·斯密；分工理论；上海临港；

基于数字叙事的日语语块教学实践研究—以东亚海滨城市为中心

李兰（成都理工大学外国语学院 硕士研究生）

随着数字媒介的深度发展，东亚海滨城市的形象建构与传播日益依赖于短视频、社交媒体、影视剧等数字叙事形式。这些叙事内容在履行文化传播功能的同时，其内蕴的、源于真实交际场景的语言资源，亦为外语教学提供了新的可能。本研究聚焦于如何将东亚海滨城市的数字叙事系统性地转化为日语教学资源，并重点融入语块教学法理念，以期在提升语言技能的同时，深化学习者对对象国区域文化的认知与理解。

研究首先锚定语块作为提升语言交际能力的关键。相较于传统教材中常显孤立的语言点，数字叙事能提供大量附着于具体社会文化语境的、高复现率的预制性语块。基于此，本研究选取横滨、神户、釜山等典型东亚海滨城市，对其代表性数字文本（如城市宣传片、旅行博主的Vlog、地方题材影视剧）进行话语分析，从中萃取高频且地道的语块。例如，从横滨相关叙事中可提炼出「みなとみらいの夜景を眺める」、「赤レンガ倉庫でショッピングを楽しむ」等结构性表达；从关乎神户历史记忆与文化风貌的叙事中，则可解析出「復興への歩み」、「異国情緒あふれる街並み」等承载深层文化语义的语块。在教学实践层面，本研究设计并实施了相应的教学方案。以中级日语学习者对象，围绕上述萃取的城市主题语块组织教学活动，最终引导学习者以小组协作形式，完成一项“城市数字导览”的模拟创作任务。

初步教学反馈显示，此路径不仅能有效激发学生的学习主体性，更促使其在对语块的辨析、记忆与创造性运用中，自然内化了与之相关的文化背景知识，实现了工具性掌握与人文素养提升的双重效能。综上所述，本研究认为，以东亚海滨城市数字叙事为载体的语块教学，超越了将语言视为单纯符号系统的传统教学范式。它通过将宏大的城市文化叙事解构为可教、可学的语言单位，为学习者开辟了一条在语言实践中主动建构文化理解的路径。这不仅为数字化时代的日语教学提供了具操作性的方法论参考，也为区域文明互鉴提供了可操作的微观实践方案。

《人民网日语版》の福建形象建构研究

方可欣（福州大学外国语学院 日语系本科生）

本研究收集 2014 至 2024 年间《人民网日语版》中福建相关报道并自建语料库，进而通过 KH Coder 进行词频分析与共现网络分析，探讨官媒所建构的福建形象及其变化趋势。研究发现：福建形象从 2015-2016 年的“政策试验场”、“海丝枢纽”及“文旅强省”形象，逐步变化至 2019 年的“经济活力省份”形象，在疫情时期被塑造为“全国协同的疫情应对者”形象，及至 2022-2024 年进一步拓展为“科技创新实践者”形象。

海に定位した生と他者の歓待

——カール・シュミット、折口信夫、ジャック・デリダ

黒岡佳柁（福州大学外国语学院 副教授）

内陸都市と異なり、沿岸都市は、その地理的条件から、海という外部から到来する者の影響を常に受けてきた。そうした沿岸都市に住む者は、時に密航などの「陸の法」を侵犯する者に備えるため、「大地のノモス Der Nomos der Erde」（C.シュミット）に依拠した、陸目線の空間理解ではなく、海に定位した空間理解を持っていたと推測される。そして、沿岸都市の人々の生にとって、海と海の彼方からの到来者は、つねに構成的であった。

では、こうした海の彼方からの到来者と常に結びつけられた生・空間をいかに理解できるだろうか。本稿ではここに、古代の日本人が、海の彼方（＝常世）から「この世・この場」に到来する神を迎えることで生活を営んでいたとする折口信夫の「まれびと」論を差し挟みつつ、他者の無条件の「歓待 l'hospitalité」の可能性を示唆した J.デリダの見解を検討することで、「われわれ」に還元不可能な異質な他者の到来とその歓待の議論を、「海からの到来者と共に生きる生」として捉え直したい。そしてその議論を、沿岸都市の環境的特質へと接合させることで、シュミットにおける「陸のノモス」や「友と敵 Freund und Feind」の議論には還元できない、「海」に定位した沿岸都市という空間の特殊性とそこに到来する他者の歓待の可能性を検討し、沿岸都市理解の一助としたい。

分论坛 5：东亚海滨城市的城市叙事与国际传播

基于抗逆力视角下韩国新安郡紫色岛发展研究

李亚伟（四川轻化工大学 讲师）

本文基于抗逆力理论，系统分析韩国新安郡紫色岛如何从偏远贫困的孤岛成功转型为国际知名旅游目的地的再生过程。研究发现，紫色岛的抗逆力构建体现在四个关键维度：生态复原上，通过“想去的岛屿”政策，在保护自然与文化遗产基础上有机更新基础设施与景观；制度创新上，依托中央与地方政策协同及“政府—专家—居民”协同治理模式，形成持续发展动力；社会防御上，通过社区经济组织建立互惠网络，增强抵御市场冲击的能力；共同体精神上，借助文化复兴与社会福利，重塑居民认同感与凝聚力。研究结论强调，紫色岛经验对中国落后岛屿的启示在于：坚持生态与文化并重、推动制度协同与居民参与、培育社区经济组织、重塑文化自信与共同体意识，从而实现真正可持续的内生发展。

野上英一《福州考》与近代日本人的福州观

林宇轩（福建师范大学 世界史硕士研究生）

近代福州的日本居留侨民群体具有丰富的历史研究价值，近代福州的日本侨民对于福州的生活体验等“福州观”也是具有充分探索空间的研究领域。1917-1929年间任“福州东瀛学校”校长的野上英一编写的《福州考》是考察近代日本人的福州观的重要史料。该报告关注的问题是《福州考》背后以野上英一为代表的日本知识人对福州的考察印象，《福州考》在当时直接成为了当时日本国内政界、学界、商界接触福州的主要材料。围绕野上英一《福州考》成书前后进行的相关史料及其内容的考察，不仅有益于目前有关学者提出《福州考》与近代福州城市变迁考察的相关结合问题，还将有益于发现野上英一其人与《福州考》在近代福州与日本交流史中所具备的经济、贸易方面的交流史价值。

19 世纪哥伦比亚旅行家阿尔梅罗的中国海滨城市叙事

陈怡伶（北京外国语大学国际中国文化研究院 硕士研究生）

本文探讨了 19 世纪哥伦比亚旅行家尼古拉斯·唐可·阿尔梅罗（Nicolás Tanco Armero, 1830-1890）在中国海滨城市旅行中的见闻与叙事。阿尔梅罗于 1855 年 6 月抵达香港，以商人身份深入通商口岸，此后还前往澳门、厦门、福州、宁波及上海等地，其旅行记录成为当时拉丁美洲与中国文化交流的珍贵史料。文章首先梳理了阿尔梅罗的生平背景与旅行动机，随后分析他对中国海滨城市社会、文化与经济的观察，重点揭示其对中国传统与现代化冲突的感知，以及对中国社会阶层结构和日常生活的细致刻画。他的书写立场兼具批判性与共情性：既揭露官僚腐败与鸦片流毒，也关注社会百态与地方特色；既受欧洲思想影响，又在拉美后殖民语境下，展现出区别于欧洲中心主义的观察视角。阿尔梅罗的书写不仅呈现了对晚清社会的直接观察，更体现出一种有别于欧洲中心主义的拉美视角，为 19 世纪“他者中国”研究提供了新的维度。

城乡博弈：后传承时代新南方民俗共同体的嬗变 ——以《潮汐图》《北流》为叙述中心

谭肖雄（天津大学冯骥才文学艺术研究院 硕士研究生）

后传承时代新南方民俗受到全球化、现代化的影响，经由村落和城市为载体的民俗共同体呈现出不同形式，并渗透至日常的民俗生活中。以林白、林棹为代表的新南方作家群体，身为民俗生活空间的原生境人，敏锐洞察到这种民俗转向；同时，书写主体性的含混让作家从学理层面搭建起精英文学话语与民间文化主体的对话平台，促成二者在文化阐释维度的镜像互构。最后，本文方法论上尝试原典文献和田野口述文献相结合，根据真实的田野口述材料，立足民俗学研究的关键词“共同体”以及其背后的传承母体为出发点，分别以林白村落书写的现代化逻辑和林棹城市书写的寰球化语境为线索，挖掘新南方民俗所处的时代特征和背景和城乡剧变后共同体的嬗变的隐秘逻辑。

佐藤春夫厦门书写的身份困境及其审美超越

关宜平（厦门理工学院外国语学院 讲师）

本文以佐藤春夫《南方纪行》中的厦门书写为研究对象，旨在揭示作家从陷入身份困境到寻求审美超越的完整心理图景。研究发现，佐藤首先在文本中构建了一个令人不安的“现实厦门”：语言的绝对隔阂使其被向导与同伴排斥在共同体之外，而弥漫于街巷的“排日”标语与“猪骨事件”等恶意符号，更将一种作为“日本人”的政治身份焦虑强加于他。然而，本研究进一步论证，佐藤的独特性在于其积极的文学应对策略。在《鹭江月明》等章节中，他主动将“听不懂”的方言转化为如“鸟鸣”般的韵律，将异质的文化场景视为一幅幅“透纳或惠斯勒的画作”，从而构筑了一个安全的审美距离。最终，通过这种高度感官化与艺术化的书写，佐藤春夫成功地在其文学世界中暂时悬置了沉重的政治身份，转型为一个沉醉于异国情调的“审美异邦人”，实现了对现实困境的精神超越与文学救赎。

旅大地区的苏联形象塑造与接纳（1945-1949）

——以《民主青年》《友谊》刊物为中心

张泽英（四川大学文学与新闻学院 硕士研究生）

1945年8月，苏联驻军旅大地区，由于苏联大国主义的心态和苏军军纪不严，其搬运机器、奸淫妇女、抢劫财物等行为给旅大人民留下不好的印象。国民政府时期，中共需要借助苏联的支持在旅大地区发展壮大自身。中共通过创办《民主青年》《友谊》等刊物，通过对时局和理论的阐释，解释苏军驻军的理由；通过时间和地区的对比叙事，以及日常情谊的叙述，打动民众靠向社会主义阵营一方；通过新闻报道，建构“社会主义阵营”的政治想象，树立苏联是社会主义阵营的领导者的形象，同时形成旅大民众对国际关系的认识。

分论坛 6：东亚海滨城市的建筑符号与遗产保护

中国澳门历史城区的文化密码——世界遗产地的保护实践与路径

卢佳琦（上海外国语大学 讲师）

本研究以中国澳门历史城区这一世界文化遗产为研究对象，展开全面且深入的探究，系统梳理其物质遗产与非物质文化遗产的完整构成体系。依据联合国教科文组织的标准，深入剖析该区域在文化遗产保护方面的宝贵经验。中国澳门文化遗产虽呈现出“中西交融”的独特表象，但其内核深深扎根于中华文明。从建筑风格到民俗传统，中华文明的元素无处不在。此外，澳门历史城区更是中国海洋文明的重要见证者，承载着古代海上贸易、文化交流的历史记忆，生动展现了中国在海洋文明发展中的重要地位与深远影响，具有极高的研究价值。

潮声里的文明印记：东亚海滨城市的建筑人文与文化遗产

李承纪（沧州师范学院 教师）

本文聚焦东亚海滨城市的建筑人文与文化遗产，以青岛、横滨、釜山、厦门、长崎等城市为研究对象，探讨建筑肌理与文化遗产的共生关系及人文价值。研究发现，东亚海滨城市的建筑兼具本土智慧与外来文化印记，如青岛德式建筑与海草房的共存、长崎唐人街的多元风格，这些建筑不仅是美学符号，更是城市人文脉络的具象载体。文化遗产的生命力体现在“活态传承”中，札幌其市场的烟火气、鼓浪屿的钢琴文化等案例，均证明文化遗产需融入当代生活才能持续焕发生机。同时，海洋的流动性赋予这些城市文化遗产“开放包容”的基因，不同文明在此交融共生，形成独特的城市人文底色。面对城市化与海洋开发的挑战，青岛“修旧如旧”、横滨景观管控等“活态保护”实践，为平衡遗产保护与利用提供了可行路径。本文认为，东亚海滨城市的建筑人文与文化遗产是海洋文明的重要印记，其价值不仅在于记录历史，更在于通过空间与活动，连接过去与未来，塑造城市的独特气质与文化认同。

海丝文化视域下厦门传统民居的建筑符号解析与当代适应性研究

董素芬（厦门理工学院外国语学院 副教授）

在“海上丝绸之路”文化复兴与城市更新双重背景下，厦门传统民居作为海丝文化的重要物质载体，其建筑符号的解析与当代适应性转化成为文化遗产保护的关键议题。本研究以闽南红砖厝、番仔楼等典型民居为对象，立足海丝文化视域，通过建筑符号学理论与文化人类学方法，系统剖析传统民居中“显性符号”（如燕尾脊、红砖拼花、南洋窗）与“隐性符号”（如空间布局、装饰纹样）的文化语义，揭示其承载的海洋贸易记忆、华侨身份认同及跨文化交融特征。

研究发现，厦门传统民居的建筑符号具有鲜明的海丝文化烙印：燕尾脊的“起翘”形态暗合航海风向标意象，红砖拼花的“出砖入石”工艺源于海上贸易的建材循环智慧，南洋窗的拱券与雕花则融合了西班牙、阿拉伯装饰元素，形成“本土基因+外来文化”的复合符号系统。然而，在当代城市化进程中，这些符号面临功能退化（如居住空间局促）、文化解构（如符号滥用导致意义消解）及保护失衡（如重外观修复轻文化阐释）等挑战。

针对适应性困境，本研究提出“三层转化”策略：其一，符号语义的活态传承，通过口述史、数字展陈挖掘符号背后的海丝故事，增强文化认同；其二，空间功能的复合利用，将传统民居改造为海丝文化主题民宿、非遗工坊，实现“居住-展示-体验”一体化；其三，政策机制的协同创新，构建“政府引导+社区参与+市场驱动”的保护模式，平衡商业开发与原真性维护。以沙坡尾避风坞片区改造为例，验证了策略的可行性——通过保留红砖厝肌理、植入南洋文化市集，既延续了海丝记忆，又激活了社区经济。

研究结论为海丝沿线城市传统民居保护提供了“文化解码-功能再生-制度保障”的完整路径，对推动文化遗产从“物质保存”向“文化赋能”转型具有实践启示。

关键词：海丝文化；厦门传统民居；建筑符号；当代适应性；文化转化

多元文化共生下的厦门建筑遗产保护策略研究 ——以鼓浪屿与集美学村为例

张海玲（厦门理工学院外国语学院 讲师）

在全球化与城市化加速推进的背景下，多元文化共生下的建筑遗产保护已成为海滨城市可持续发展的关键议题。厦门作为“海上丝绸之路”重要节点城市，其建筑遗产以鼓浪屿万国建筑与集美学村嘉庚建筑为代表，分别体现了中西文化碰撞与本土文化创新的双重特质，为研究多元文化语境下的遗产保护策略提供了典型样本。

本研究以鼓浪屿（世界文化遗产）与集美学村（国家级重点文物保护单位）为案例，通过对比分析两处遗产在文化属性、保护模式与活化路径上的差异，揭示多元文化共生对建筑遗产保护的影响机制。鼓浪屿以“历史国际社区”为定位，强调建筑风貌的整体性保护与跨国文化记忆的存续，其策略侧重于国际协作、风貌管控与社区参与；而集美学村作为陈嘉庚先生教育理念的物质载体，以“嘉庚精神”传承为核心，通过功能活化（如校史展览、文化研学）实现遗产的教育价值延续。研究采用文献分析法、田野调查与深度访谈，结合空间生产理论、文化生态学框架，发现两处遗产虽面临商业化冲击、原住民流失等共同挑战，但保护逻辑存在本质差异：前者需平衡“世界性”与“本土性”，后者则需强化“文化符号”与“现实功能”的衔接。

针对保护策略的优化，本研究提出三点建议：其一，构建“分层分类”保护体系，区分国际级遗产与本土文化地标的保护优先级；其二，创新社区参与机制，通过利益相关者协同治理（如居民、政府、企业）提升保护可持续性；其三，推动“文化赋能”式活化，利用数字技术（如VR复原、元宇宙展陈）增强遗产的传播力与吸引力。研究结论为同类海滨城市提供了兼顾文化多元性与保护实效性的策略参考，对推动遗产保护从“静态保存”向“活态传承”转型具有实践意义。

关键词：多元文化共生；建筑遗产保护；鼓浪屿；集美学村；厦门

论福建船政工业遗产与福州海滨城市文化的建构及再生

陈文佳（华中师范大学中国工业文化研究中心 博士研究生）

福建船政工业遗产，是福州海滨城市历史文化的地标与物质载体，它见证了福州的近代化进程，并成为建构现代城市文化的重要基础。其所蕴含的船政文化，是海洋文化与工业文化相融合的典范，为福州海滨城市精神注入了“自强、开放、创新”的工业文化内核。作为珍贵的活态遗产，其在改革开放时期的成功复兴，有力推动了福州海滨城市的文化再生与空间更新。船政工业遗产的保护与利用，不仅成就了福州本地文化价值的特殊性，也为中国沿海城市处理工业遗产与城市发展的关系，提供了具有普遍意义的典型案例。

分论坛 7：东亚海滨城市的文学与思想史研究

献给革命遗族的“花环”——尾崎秀树的鲁迅研究及其生命实践

邵海伦（福建师范大学 助理研究员）

本文以尾崎秀树的《与鲁迅对话》为中心，探讨其充满争议的“鲁迅政治幻灭论”之成因。不同于既往研究多遵循丸山升的批判路径，本文认为尾崎的鲁迅论是其个人生命经验与特定历史语境下的深刻共鸣。通过分析其兄尾崎秀实作为“革命遗族”的创伤，以及尾崎秀树自身在战后被冷战及日本共产党左翼叙事排斥的“遗族”体验，本文揭示出其鲁迅研究的内核，是为那些被历史污名化的国际主义革命者正名的生命实践。他将鲁迅塑造为一个跨越国界的“花环”，既是为了慰藉如兄长般的革命遗族，也是试图在冷战的坚冰下，重新焊接起一条断裂的国际主义精神谱系。

“隐元豆”与“朱子学”：物与思想在福州—长崎航线上的双向流动

惠子函（中国传媒大学人文学院 博士研究生）

17至18世纪的福州—长崎航线，是东亚世界文明互鉴的一条“大动脉”。以往研究多聚焦于贸易商品与精英思想的单向传播，本文则尝试打破“物质”与“思想”的二元区隔，采取一种交织互动的“物质文化史”与“全球思想史”相结合的新路径。以“隐元豆”（即菜豆，伴随明末高僧隐元隆琦东传日本，后成为日常食物）与“朱子学”（作为官方意识形态传入日本，又经日本学者诠释后形成“古学派”等新思想）为核心案例，描绘一幅双向乃至多向的文化流动图景。福州—长崎航线上的文明互鉴是一个多层次、立体化的过程。它不仅体现在隐元禅师创立黄檗宗，将中国明清的佛教仪轨、建筑、书画等“高级文化”体系性地移植至日本；更深刻地渗透于日常生活的物质基础之中——“隐元豆”的引种与命名，正是中国文化以一种“舌尖上的记忆”方式嵌入日本社会的生动体现。与此同时，思想的反哺同样存在：日本的朱子学者（如山崎闇斋）及其批判者（如伊藤仁斋）对经典的独特诠释，其著作又通过商船反馈至中国，为清代考据学提供了异域的参照系。本文旨在揭示，从果腹的豆蔬到精深的哲学，从有形的器物到无形的观念，在福州与长崎这两个枢纽之间，共同构成了一张动态的文明交流网络。重新审视这一网络，有助于超越“中心—边缘”的旧叙事，理解东亚文明互鉴的真正深度与广度。

芥川龙之介《他之二》中的东京与上海城市镜像

张维天（中国传媒大学 硕士研究生）

本文以芥川龙之介《他之二》为研究对象，以东亚海滨城市的视角出发，探讨东京与上海在近代化过程中的文化定位与城市形象。两城市同为东西方文化交融的重镇，并分别代表了中日两国被迫卷入近代化浪潮的历史路径。正因为它们兼具河流和海洋气质，所以才在近代化中扮演了这样的角色。在芥川笔下的东京，河流承载了深厚的情感记忆，体现了对传统的依恋；而上海则以黄浦江与远洋船灯为象征，更强烈地呈现出海洋文明的属性与西化色彩。文中进一步分析主人公“他”在两地所体验的文化冲击与身份撕裂。在东京，他尚能通过河流寻得一丝文化慰藉；而在更为西化的上海，他却陷入彻底的迷失与绝望，最终走向死亡。这一对比不仅揭示出芥川对东西文明碰撞的复杂态度，也暗含其对个人精神困境的反思。通过城市景观、文化符号与人物心理的多层次对照，本文试图重新解读《他之二》中蕴含的近代东亚文化认同与精神漂泊的主题。

创伤的互鉴：《将军族》中的身体媒介与东亚港城的记忆流动

马婉清（西藏民族大学 硕士研究生）

本文旨在通过对陈映真小说《将军族》的文本细读，提出并论证一种常被主流叙事所遮蔽的互鉴模式——“创伤的互鉴”。传统研究多关注思想、商品与技术的积极流动，本文则认为，在基隆港这一东亚海滨城市的历史交汇点上，身体成为了创伤记忆流通与互鉴的核心媒介。小说中，“三角脸”与“小瘦丫头”衰老、病弱与被损害的躯体，已超越了个人不幸的范畴，他们的身体正是集体历史的记忆载体与文明碰撞下的深刻印记——前者铭刻了战后大陆移民的离散创伤，后者承载了中国台湾本底的贫困与剥削。

基隆港作为权力交织的空间，迫使这两类源自不同历史的创伤在此汇聚，并于人物的肉身之上完成了一次残酷的融合。他们的相互怜惜，实质是身体所承载的创伤知识在底层社群间的深刻理解与流动；而其悲剧性的结局，更是以身体为最后的文本，对历史暴力发起无声而壮烈的控诉。本研究借助身体理论与文化记忆理论力图揭示：个体身体的创伤正是集体历史的记忆，也是文明的印记。东亚海滨城市的“文明互鉴”史，必须包含对这种以身体为载体的创伤性知识流动的承认与审视。文学叙事以其对个体生命的深邃关照，为我们补全了这幅历史图景中不可或缺的晦暗篇章。

东亚海滨城市思想史研究与文化传承机制

陈雪咪（湖北师范大学历史文化学院 硕士研究生）

本研究聚焦“东亚海滨城市思想史研究与文化传承机制”，旨在深入挖掘东亚海滨城市在历史发展进程中形成的思想内涵及其文化传承脉络。首先，通过对东亚不同海滨城市（如中国的青岛、日本的横滨、韩国的釜山等）的文献梳理、实地考察，梳理其在宗教传播、贸易交流、移民互动等活动中产生的多元思想，包括海洋文明观念、东西方文化融合思想等。其次，分析这些思想如何通过城市建筑、民俗活动、教育体系等载体进行传承，探究不同传承载体之间的相互作用关系。研究发现，东亚海滨城市的思想史具有开放性与包容性的显著特征，文化传承机制则呈现出官方引导与民间自发相结合的模式。在全球化与现代化的冲击下，部分传统思想与文化遗产面临断裂风险，而通过对传承机制的研究，可为构建更有效的文化保护与传承策略提供理论依据，助力东亚海滨城市在保留自身文化特色的同时，实现文化的创新性发展，促进东亚地区文化交流与互鉴。

海滨文明的文学回声

——论石牟礼道子《苦海净土》三部曲中的“道子体”与知识流动

杨金颖（东北师范大学文学院 硕士研究生）

熊本县水俣湾地处有明海沿岸，虽为地方性港湾，却位于东亚海洋文明圈的边缘地带。石牟礼道子的《苦海净土》三部曲以水俣病为叙事核心，通过方言、听写、证词与诗性语言等手法，构建了跨越虚构与见证的独特文体——“道子体”。本文结合战后日本的政治语境与杂志话语空间，探讨“道子体”如何使地方经验转化为具有普遍伦理意义的文学表达，进而呈现出一种跨越地域与学科的知识流动。石牟礼的书写不仅揭示了日本现代化进程中人与自然、国家与地方的冲突，也折射出东亚海滨社会共同的生态危机与精神困境。她以文学之声回应工业文明的创伤，为理解区域海洋文明的人文转向与文明互鉴提供了新的视角。

分论坛 8：东亚海滨城市的历史记忆与区域互动

长崎华人宗教信仰的历史流变与社会功能探究

任江辉（集美大学外国语学院 日语系主任、教授）

长崎作为江户时代日本唯一的对外贸易窗口，在近世东亚海域贸易网络中占据核心地位，其华人宗教信仰的形成与演变深刻烙印着中日两国“海禁”体制的双重影响。以 17 世纪至 21 世纪的长崎华人为研究对象，梳理唐馆时期、开港后转型期及当代社会三个阶段的信仰实践，剖析佛教、民间信仰与外来宗教在华人社群中的传播脉络、功能嬗变与文化融合。显然，长崎华人宗教信仰始终呈现“实用性与象征性并存”的特征。即：唐馆时期的“唐三寺”既是信仰载体，也是社群管理与身份标识的工具；转型期信仰实践从封闭走向开放，逐渐嵌入日本地方社会；当代则形成传统信仰复兴与多元信仰并存的格局，成为文化认同与跨文化交流的纽带。通过还原长崎华人宗教信仰的历史场景，揭示海外华人信仰体系“在地化”与“原乡性”的辩证关系，为理解东亚海域文化交流史提供新视角。

潍县集中营的中外文学书写与二战潍坊形象构建

王爱红（潍坊学院 副教授）

潍县集中营作为二战时期侵华日军关押盟国侨民的特殊场所，其历史记忆通过中外文学书写的双重叙事得以立体呈现，最终将潍坊从一个单纯的地理坐标，构建为承载战争创伤、人道主义光辉与跨文化情谊的精神符号。这种形象的生成并非单一视角的塑造，而是中外创作者基于历史事实的共同书写成果。外籍亲历者与研究者的文学创作，以“他者视角”记录了潍坊在战争中的特殊存在，构建起以“禁锢与坚守”为核心的城市记忆。中国创作者的文学实践则突破了“禁锢空间”的局限，通过“围墙内外”的双向叙事，为潍坊注入“大爱无疆”的人道主义底色。中外文学书写的对话与互补，最终构建起多维度的二战潍坊形象。域外书写提供了国际视野下的历史真实性，本土创作则挖掘了地域文化中的精神内核，二者共同将潍坊从“地理名称”升华为“文化符号”。国际囚笼”到“和平之城”的形象演变，不仅还原了潍坊在二战中的独特历史位置，更使其成为连接中外记忆、传递人类共同价值的精神纽带，为当代潍坊“开放包容”的城市精神提供了深厚的历史注脚。

沟通内外与商品中转：清末民初时期汕头的对外贸易研究 ——基于日本驻汕头领事报告的调查数据

李博强（福建师范大学社会历史学院 博士后）

清末民初时期，汕头作为重要的通商口岸，其地位在中外经贸关系中较为突出。日本政府通过驻汕头领事馆，系统而广泛地收集汕头地区的政治、经济、文化和军事在内的各类情报，其中对汕头的通商贸易情况调查十分详细。领事报告展现了汕头作为华南水运要冲，航运网络日渐发达，对外贸易形成以香港为中介地的转口贸易，以南洋为目的地的出口贸易和以日本为来源地的进口贸易三种主要形态。通过领事报告可以发现近代汕头对外贸易的总量排名全国前列，主要承担商品中转的功能，且呈现出进口大于出口的贸易特点。汕头与香港、南洋和日本等地的密切贸易联系，使其在中国南方沿海的经济贸易活动中扮演了重要角色，这也引起了日本政府的高度关注。

西学东渐与地方回应： 新教传教士与福建口岸城市的社会转型（1840-1900）

唐林洁（澳门大学人文学院 硕士研究生）

自鸦片战争以来，晚清帝国逐步卷入近代化的浪潮，伴随鸦片而来的还有大批传教士。本文以福州、厦门为案例，探讨在西学东渐的背景下，基督教传教士的活动如何与地方社会发生互动。传教士不仅是中外文化交流的载体，也承担着调节文化冲突的任务。同时，本文意图指出 19 世纪福建口岸城市的社会转型是西方殖民者与地方主动适应的结果。

外来之眼与本土之城：唐代福州的文化交融与城市形象

沙骏雅（陕西师范大学历史文化学院 硕士研究生）

唐代福州作为东亚海滨的重要城市，是海上丝绸之路的枢纽港口，同时又在中央传统认知中被视为偏远之地。随着海外商人、僧侣和外交使节的频繁往来，外来文化不断涌入，不仅为福州带来了多样的宗教、物质文化，也间接影响了唐王朝对该城市的形象认知。在外来文化的活力推动下，本土文化、中原文化和多元外来文化相互交融，福州由此摆脱简单的“文明边缘”形象，发展成展现多元交融的区域文化圈。同时，作为众多来华人士的登陆首站，福州不仅被塑造，也在文化往来中发挥中介作用，成为唐朝与东亚世界互相了解的重要桥梁。在这种多元文化交汇、王朝与海外形象的互动认知中，福州的城市地位得到重新定义，获得中央在行政治理和文化建设等方面的更多支持，逐渐成长为海滨邹鲁和东南重镇，并成为东亚文明交流互鉴的重要历史见证。

ポール・クローデル『東方所感』における樹木と都市の表象

池泽充弘（福州大学外国语学院 日语专业外籍教师）

福建福州市を中心に外交官として長く中国に赴任した外交官ポール・クローデル Paul Claudel は『東方所感』 *Connaisance de l'Est* (1900) を著した。中国、日本を含む東アジアの詩的探訪記ともいえるべきこの散文集の中で、クローデルは中国を banyan (榕树, バニヤン、ガジュマル) のイメージに託す。このイメージは日本を象徴する松 (Le pin) 等のイメージよりも特権的な地位を与えられており、本発表ではこの樹木のイメージと、『東方所感』に描かれる中国の都市表象とを関連付けながら、クローデルの沿岸都市表象の意義を考察したい。

分论坛 9：东亚海滨城市的建筑人文与城乡规划

变与不变之间：宁波旧城区形态与地方记忆的历史叙事

金盼盼（东京大学大学院都市工学 特任研究员）

宁波作为中国东南沿海的重要港口城市，其历史形态的演变过程体现了传统空间结构与现代化规划逻辑之间的复杂张力。本文以明清以来的宁波旧城区为研究对象，结合经典历史地理形态学的分析框架与地方志、舆图、档案等史料，探讨城市形态要素，包括街巷格局，公共空间与城间中心等演化轨迹。研究通过在地化地应用形态学概念，揭示了宁波城市空间在近代化进程中所呈现出的“延续”与“改写”并存的特征：一方面，传统形态在地理环境与社会结构中保持了深层的空间惯性；另一方面，现代规划与基础设施建设则推动了空间秩序的再组织与功能再定义。研究尝试从形态学的角度阐释东亚沿岸城市在现代化进程中的在地响应，为理解历史城区的文化连续性与形态更新提供新的视角。

東アジア沿岸の禅院にみる清規と伽藍関係 ——僧侶の修行生活動線による分析

金雄杰（早稲田大学大学院創造理工学研究科建築学専攻 博士課程）

本発表は、禅の二晋伝来・唐代成立以後、九世紀に新羅高僧が馬祖門下より得法して創出した九山禅門、とりわけ沿岸都市山郊の聖住寺・鳳林寺・掘山寺、ならびに中国の万年寺・天童寺、日本の博多・聖福寺および鎌倉・建長寺・円覚寺等を含む中・韓・日の沿岸禅院事例を対象に、『百丈清規』および後代の『禅苑清規』に基づく修行動線と伽藍配置の対応を比較的に予察するものである。他方、高麗後期には禅宗の影響が減衰し、知訥の定慧結社による再興を経て、朝鮮期には瀬翁の帰朝に伴う檜巖寺に元代的布置が観察される。注目すべきは十三世紀の高麗版『禅苑清規』（高麗大蔵経）および知訥『松広清規』・西山休静『禅家龜鑑』の存在である。ここで、清規の繁雑化と伽藍構成の漸次的簡略化との相関は、僧侶が日常修行と空間利用の均衡を図った実践知の反映と捉える。以上を踏まえ、宋版／高麗版の条文差と動線差を鍵として、中・韓・日沿岸禅院の空間在地化を初歩的に論じる。

福州大学简介

福州大学是国家“双一流”建设高校、国家“211工程”重点建设大学、福建省人民政府与教育部共建高校。学校创建于1958年，现已发展成为一所以工为主、理工结合，理、工、医、经、管、文、法、艺等多学科协调发展的重点大学。

建校以来，一代代福大人秉承“明德至诚 博学远志”校训，践行以张孤梅同志为代表的艰苦奋斗的创业精神、以卢嘉锡先生为代表的严谨求实的治学精神、以魏可镁院士为代表的勇于拼搏的奉献精神等“三种精神”，营造“守正创新、彰显特色、开放包容、追求卓越”的新时代福州大学校园文化，积累了丰富的办学经验，形成了鲜明的办学特色，已为国家培养了全日制毕业生33万余人。



学校设有27个学院（含1个独立学院和1个中外合作办学学院）和1家附属省立医院，现有在校普通本科学生39333人（含至诚学院学生13193人）；各类博、硕士研究生17730人。学校现设85个本科专业；39个硕士一级学科学位授权点，25个硕士专业学位授权类别；19个博士一级学科学位授权点，5个博士专业学位授权类别，12个博士后科研流动站。学校拥有1个国家重点学科、1个国家重点(培育)学科，化学学科再次入选世界一流学科建设名单。12个学科进入ESI学科全球排名前1%，其中化学、工程学、材料科学3个学科进入ESI学科全球排名前1%。学校综合实力在“2024软科世界大学学术排名”位居全球第298名，内地高校51名；在

USNews2024-2025 世界大学排行榜位居全球第 425 名，内地高校第 54 名；在 2025 泰晤士高等教育世界大学排名位居全球第 601-800 名，内地高校并列 43 名；在 2024QS 亚洲大学排名位居第 247 名，内地高校并列 55 名。

学校现有教职工 3355 人（专任教师 2398 人），其中国家级人才 146 人次（100 人）、省级人才 1042 人次（789 人）。在高层次人才（团队）中，拥有院士 11 人（含特聘讲席教授 7 人），“长江学者奖励计划”人选 16 人（含青年项目 6 人），国家级高层次引进人才 22 人（含青年项目 16 人），国家“万人计划”入选者 25 人（含青年项目 7 人），国家杰出青年科学基金获得者 12 人，全国杰出专业技术人才 1 人，“百千万人才工程”国家级人选 12 人，国家有突出贡献中青年专家 9 人，国家优秀青年科学基金获得者 10 人，国家自然科学基金优秀青年科学基金项目（海外）获得者 8 人，科技部中青年科技创新领军人才 6 人，文化名家暨“四个一批”人才 3 人。1 支团队入选“全国专业技术人才先进集体”，2 支团队入选“全国高校黄大年式教师团队”，2 支团队入选教育部“长江学者和创新团队发展计划”，2 支团队入选科技部“创新人才推进计划”重点领域创新团队，2 支团队入选“国家自然科学基金创新研究群体”。1 个学院入选国家“高校国际化示范学院推进计划”，4 个学院入选国家“高等学校学科创新引智计划”（“111 计划”），1 个学院入选“国家引才引智示范基地”。

学校拥有 2 个国家级人才培养基地、6 个国家级实验教学示范中心、1 个国家虚拟仿真实验教学中心、1 个国家人才培养模式创新实验区、6 个校企合作的国家工程实践教育中心、1 个全国工程专业学位研究生联合培养示范基地、1 个教育部首批“三全育人”综合改革试点学院，1 个教育部基础学科拔尖学生培养计划 2.0 基地，1 个教育部涉外法治人才协同培养创新基地，1 个国家级虚拟教研室，1 个国家教学团队，7 个国家特色专业，37 个国家一流本科专业建设点，23 个专业通过工程教育专业认证及专业评估，其中 20 个专业通过教育部工程教育专业认证，3 个专业通过住建部专业评估，获评 41 门国家一流本科课程、3 门国家精品课程、1 门国家双语教学示范课程、3 门国家级精品资源共享课、2 门国家级精品视频公开课、7 个教

育部“新工科”研究与实践项目，4个教育部“新文科”研究与改革实践项目，获批教育部课程思政示范课程1门、国家级课程思政示范教学团队1个、全国思政课程教学名师工作室1个，入选高等学校思想政治理论课教学指导委员会委员1人、省级课程思政研究与实践中心2个、省级一流本科课程182门、省级课程思政示范课程8门（本科）。入选4个省级现代产业学院。学校是全国专业学位研究生教育综合改革试点单位和全国工程硕士研究生教育创新高校、教育部“卓越工程师教育培养计划”改革试点高校和教育部“国家大学生创新创业训练计划”实施高校。“十四五”以来，学校获国家级教学成果奖3项，省级教学成果奖34项；学生参加各类学科竞赛获251项国际奖，1932项国家级奖。学校入选“首批国家级创新创业学院建设单位”“全国首批深化创新创业教育改革示范高校”“国家级众创空间”“国家大学生创业示范园”。在十届中国国际大学生创新大赛全国总决赛中获16金32银48铜。曾荣获“全国高校毕业生就业工作50强”。

学校现有1个国家级大学科技园，15个国家级、128个省部级科技创新平台、29个省部级社科平台，其中：4个全国（国家）重点实验室、7个国家级工程研究中心、1个国家工程技术研究中心、3个国家国际科技合作基地、4个教育部重点实验室、2个教育部工程研究中心、2个省部共建协同创新中心、1个自然资源部创新服务平台、2个省创新实验室、7个省部级智库、1个省哲学社会科学重点实验室。学校是福建省唯一同时拥有“国家大学科技园”“国家技术转移示范机构”“高等学校科技成果转化和技术转移基地”“国家知识产权试点高校”“国家级众创空间”“全国大学生创业示范园”“全国深化创新创业教育改革示范高校”“全国创业孵化示范基地”的高校。“十四五”以来，学校获各类纵向科技项目3738项，科研经费18.32亿元；逐步在福建省九地市布点建设科技园网络体系，搭建了“一园三区，联动发展；辐射多点，创新共赢”的发展格局。签订横向合作合同3787项，校地企合作到校经费11.05亿元。获省部级以上奖项98项，其中，国家科技奖4项。获国家专利授权5535件，科技论文被三大检

索收录 14484 篇，其中在 Nature 期刊发表论文 5 篇，在 Science 期刊发表论文 3 篇，13 位次学者入选“全球高被引科学家”名单。

学校深入开展对外合作交流，与英国剑桥大学、德国亚琛工业大学、新加坡国立大学、香港理工大学等境外 50 个国家、地区的 140 多所高校、科研机构 and 知名企业建立了合作关系。学校建立国际科教合作交流平台，培育建设国际暨台港澳合作联合实验室；积极对接国家“一带一路”倡议，成为中国政府奖学金留学生接收院校，面向 30 余个国家招收来华留学生；推进“一带一路”教育科研合作新范式，与马来西亚拉曼大学共建未来技术联合研究院。学生出国（境）访学项目涵盖本硕博层次，覆盖 95% 以上的学院；聘请 50 余名海外专家学者长期在校任教。现有 1 个中外合作办学机构，3 个中外合作办学项目，涵盖本科及研究生层次。对台交流合作向纵深发展，成建制联合培养模式成为闽台教育交流合作的新亮点。

学校校园环境优美、教学和科研设备先进、公共服务体系完善，不断推进文化校园、智慧校园和生态校园建设。办学主体位于旗山校区，在福州、厦门以及泉州等地拥有 7 个校区，校舍建筑面积 179.82 万平方米。学校固定资产总值约 81 亿元，其中教学科研仪器设备值 25.62 亿元；运动场地总面积 21.8 万平方米；图书馆藏图书 426 万册，电子图书 930 万册。

学校正朝着“建成具有若干世界一流学科的国际知名高水平大学，成为世界一流的东南强校”的宏伟目标大步迈进，努力为国家和社会经济发展作出新的更大贡献！

福州大学外国语学院简介

福州大学外国语学院现有英语、日语、德语三个本科专业，外国语言文学一级学科硕士点（含英语语言文学、外国语言学与应用语言学、日语语言文学、比较文学与跨文化研究四个二级学科硕士点）与翻译专业硕士（MTI）学位点（含笔译方向、口译方向）。英语专业是国家级一流本科专业建设点。现下设英语系、日语系、德语系、公共外语教学部四个教学单位；拥有福州大学跨文化话语研究中心（福建省高校人文社科研究基地）、福建国际传播中心省级基地、福州大学区域与国别研究院（欧洲研究院）、翻译研究所、外语类课程思政研究与实践中心、外语教育教学研究中心、翻译实践中心等多个教学科研平台；拥有剑桥商务英语考试中心、CATTI福建省考点、跨文化教学与测评研究基地等社会服务平台。

学院成立于2003年，其前身是1958年成立的外语教研室以及1981年成立的外语系。1978年招收英语专业专科生，1982年开始招收英语专业本科生，2001年获批英语语言文学硕士点，2002年设置日语专业本科，2005年设置德语专业本科，2010年获批外国语言文学一级学科硕士点、外国语言文学及应用语言学硕士点和翻译专业硕士学位点。2013年获批日语语言文学硕士点，2019年设立比较文学与跨文化研究硕士点。

学院教科研条件先进，学习环境优雅，已建成并投入使用一系列功能先进、配套完善的现代化教学空间，主要包括：跨文化智慧教室2间（支持多模态教学互动与跨文化场景模拟）、同声传译室2间（配备专业传译设备）、高清录播室1间（可满足精品课程录制、教学研讨复盘等需求）、口笔译实验室2间（搭载专业翻译实训软件）、标准化语言实验室3间（提供沉浸式语言学习环境），以及综合性翻译实践中心1间（整合校企合作资源）。这些设施覆盖了语言教学、翻译实训、学术研讨、成果转化等综合性需求，既为教师开展创新性教学与科研工作提供了坚实支撑，也为学生构建了理论与实践深度融合的学习场景。

学院本着突出优势特色、优化学科布局、加强学科交叉融合的发展原

则，学科建设不断取得新进展。学院在跨文化话语研究、文体学、英美文学、翻译理论与实践、语言学、外语教学等方面已形成自身研究特色。学院坚持教学和科研相结合，积极整合校内外资源，形成科研和教学团队，注重培养学生的外语应用能力、跨文化交际能力、人文素养、爱国情怀、国际视野。学院依托福州大学跨文化话语研究中心（福建省高校人文社科基地）开展科研和社会服务活动，为厦门金砖国家领导人会议编撰中英双语《你好，福建！》文化礼品书。

学院坚持开放办学的理念，鼓励师生参与国际合作与交流，培养具有国际视野和能够参与国际事务和国际竞争的国际化人才。目前已与英国、澳大利亚、新西兰、日本、德国等国家的著名高校签订了联合培养或合作协议，积极开展形式多样、内容丰富的国际学术合作交流活动。学院先后派出大批骨干教师到国（境）外进修、攻读学位，每年均邀请国（境）外学者来学院交流和讲学，并构建了形式多样的学生联合培养项目，为培养学生的国际视野和跨文化交流能力等提供了良好的条件。

学院始终以服务学生成长成才为宗旨，在思政教育、文化艺术、志愿服务等方面成绩突出，逐步形成了具有外语学科特色的思政工作品牌。凭借深厚扎实的外语语言功底，学生志愿者在福建博物院、各类大型国际会议、外事活动中提供陪同口译、交替传译等翻译服务，获得社会各界一致好评。

学院秉承“明德至诚，博学远志”的校训，顺应福州大学“创建具有若干世界一流学科的创业型国际知名高水平大学，加快建成世界一流的东南强校”的宏伟目标，坚持立德树人，教学科研并重，努力培养高层次外语人才，为福州大学“双一流”建设和区域经济社会发展作贡献！

School of Foreign Studies

The School of Foreign Studies (SFS) at Fuzhou University (FZU) equips students with the linguistic competence, cultural awareness, and global vision to navigate the globalized world. For undergraduate education, the SFS offers three Bachelor of Arts (BA) programs in English, Japanese, and German, fostering a deep understanding of these languages and their cultures. At the postgraduate level, the SFS offers a first-level Master's degree program in Foreign Language and Literature, which includes four second-level disciplines: English Language and Literature, Foreign Linguistics and Applied Linguistics, Japanese Language and Literature, and Comparative Literature and Intercultural Studies. In addition, the Master of Translation and Interpreting (MTI) program prepares graduates for success in the expanding field of language services.

The SFS holds a national-level first-class undergraduate program in English. It consists of four departments: the Department of English, Department of Japanese, Department of German, and Department of Public Foreign Language Teaching. To enhance both teaching and research, the School operates several key academic platforms, including the Fuzhou University Center for Intercultural Discourse Studies (a Provincial Research Center for Humanities and Social Sciences), the International Communication Center for Fujian Regional Culture, the Institute of International and Regional Studies, the Institute of Translation Studies, the Center for Moral and Civic Education in Foreign Language Courses, the Foreign Language Education and Teaching Research Center, and the Translation Practice Center. The School also offers valuable social service platforms such as the Cambridge Business English Examination Center, the CATTI Examination Center (China Accreditation Test for Translators and Interpreters), and the Base for Intercultural Teaching and Assessment Research.

Founded in 2003, the SFS builds upon a rich legacy dating back to the founding of the Foreign Language Teaching and Research Office in 1958. This pioneering spirit continued with the establishment of the Department of Foreign Languages in 1981. The English major first admitted students to its Diploma Program in 1978 and launched its Bachelor's Program in 1982. Building on this foundation, the School introduced Japanese studies in 2002 and German studies in 2005, further expanding its disciplinary landscape. Its academic strength grew steadily after receiving authorization in 2001 to offer a master's program in English Language and Literature, followed by approval in 2010 to grant first-level Master's degrees in Foreign Language and Literature, along with programs in Foreign Linguistics and Applied Linguistics and MTI.

More recently, the School has continued to diversify its graduate programs. In 2013, a master's program in Japanese Language and Literature was established, followed by the 2019 introduction of the Master's program in Comparative Literature and Intercultural Studies. This ongoing program development ensures students to be well prepared for the job market and a successful academic career path.

The School offers a well-resourced and inspiring learning environment, featuring advanced teaching and research facilities. Its primary facilities include two Cross-Cultural Smart Classrooms, two Simultaneous Interpretation Booths, one Recording Studio, two Interpretation and Translation Laboratories, three Language Laboratories, and one Translation Practice Center, all designed to support high-quality teaching, research, and professional training.

Guided by the principles of highlighting distinctive advantages, optimizing disciplinary structures, and promoting interdisciplinary integration, the SFS has achieved remarkable progress in academic and research innovation. Faculty have established strong research specialties in intercultural discourse studies, stylistics, Anglo-American literature, translation theory and practice, linguistics, and foreign language teaching. Their research achievements have been integrated into teaching, ensuring students benefit from the latest research and scholarship.

The school takes advantage of internal and external resources to form research and teaching teams. Beyond language proficiency, students are encouraged to develop strong intercultural communication skills, a solid foundation in the humanities, patriotic commitment, and a global outlook. Drawing upon the resources of the Fuzhou University Center for Intercultural Discourse Studies, the School actively engages in research and social service. The School's engagement in research and public service is exemplified by the publication of the bilingual book *Hello, Fujian!* —a cultural gift presented at the 2017 BRICS Leaders' Meeting in Xiamen.

Upholding an open and globally oriented educational philosophy, the SFS promotes international cooperation and exchange. It has established partnerships with prestigious universities in the United Kingdom, Australia, New Zealand, Japan, and Germany, facilitating faculty and student exchanges, joint training programs, and visiting scholar activities. Each year, renowned international scholars are invited to deliver lectures and workshops, enriching the School's academic community.

Committed to student-centered development, the School also excels in patriotic education, cultural and artistic promotion, and volunteer service, forming a distinctive model of civic education within foreign language disciplines. Utilizing their professional expertise, student volunteers have provided translation and interpreting services for international conferences, diplomatic events, and cultural institutions such as the Fujian Provincial Museum, earning wide recognition for their professionalism and dedication.

Adhering to the motto of “pursuing illustrious virtue with utmost sincerity and wisdom with far-reaching aspiration,” the School upholds the vision of Fuzhou University to become an internationally renowned high-level university with world-class disciplines. Dedicated to moral and civic education, academic excellence, and innovative talent cultivation, the School of Foreign Studies continues to contribute to Fuzhou University's “Double First-Class” initiative and to the broader social and economic development of southeastern China.

福州大学外国语学院日语专业简介

福州大学外国语学院日语专业创立于 2002 年,2015 年获批日语语言文学硕士学位授予权,形成了本硕一体化的人才培养体系。本专业致力于培养具备扎实的日语语言与文学功底、广博的社会文化知识及跨文化交际能力,具有宽广国际视野和良好人文素养的高层次复合型日语人才。毕业生能够胜任翻译、教育、外事、外贸、管理及文化交流等领域工作,为国家经济建设与社会发展服务。

日语专业坚持以立德树人为根本,以语言文学教育为核心,以跨文化交际与区域国别研究为特色,构建了“语言能力—文化素养—创新实践—跨学科拓展”四位一体的课程体系。课程覆盖学科基础课程、专业必修课程、选修课程、创新创业实践与素质拓展课、集中性实践环节、跨学科课程等模块。学生通过系统学习与综合训练,不仅掌握语言技能,更具备对日本社会、文化、文学的深入理解与批判性思维能力,为跨专业考研与留学深造奠定坚实基础。

现有专任教师 13 人,其中教授 1 人、副教授 4 人、讲师 8 人,其中博士教师 8 人。此外,日籍特聘副教授 1 人、日籍专任教师 1 人。专业拥有“日本学与黄檗文化”研究团队,依托福建省高校人文社科研究基地福州大学跨文化话语研究中心、福州大学外语类课程思政研究与实践中心等科研教研实践平台,每年定期邀请国内外著名大学学者到我院进行学术交流活动。教师团队坚持教学科研协同发展,近年获批省部级科研课题 7 项、厅校级课题 20 余项,荣获国家级教学竞赛二等奖、校级教学成果奖等多项荣誉,拟出版教材一部。

日语专业在办学过程中形成了鲜明的国际化培养特色,与日本多所高校建立合作关系。与日本长崎大学、长崎外国语大学、大阪公立大学等高校建立短期交换留学制度,每年选派优秀本科生赴日交换留学一年,研究生赴日交换留学半年;同时推荐优秀毕业生赴日本法政大学、武藏野大学等高校继续深造。

日语专业在人才培养过程中强调理论与实践并重的育人模式，突出语言实践能力。拥有实践类特色课程“中日文化艺术交流与体验”，2023年获批“省级一流课程（社会实践类）”。该课程包括茶道、花道、配音、戏剧、中日文化实践地考察等多种形式，最后以“中日文化交流展”的形式汇报演出，已举办15届。此汇报演出曾被腾讯大闽网、《日中友好新闻》、福州大学新闻网等多家媒体报道。

日语专业注重“以赛促学”的人才培养模式，每年在学院层面开展日语演讲赛、配音比赛、朗诵比赛、作文比赛等，为全国赛选拔和培育种子选手。积极鼓励学生参加各类学科竞赛，包括外研社·国才杯“理解当代中国”全国大学生外语能力大赛、笹川杯作文大赛、人民中国杯日语国际翻译大赛、华南区中华日语演讲赛等，并在各类赛事中取得良好成绩。近三年参加省级以上学科竞赛获奖共21项，获奖人数达到70余人。

日语专业毕业生就业面广，涵盖外事管理、国际商务、文化传媒、教育翻译等领域。主要就业单位包括紫金矿业、恒安集团、福建网龙、厦门中达等知名企业及外事机构，2024年本科就业率达90%。

近年来，日语专业升学率稳步上升。国内升学去向包括南开大学、厦门大学、北京外国语大学、对外经济贸易大学等，境外升学去向包括东京大学、大阪大学、名古屋大学、九州大学、一桥大学、北海道大学、法政大学、杜伦大学等世界知名高校。

福州大学外国语学院日语专业始终秉承“明德至诚，博学远志”的校训精神，顺应福州大学建设世界一流东南强校的总体目标，坚持立德树人、教学科研并重，积极探索跨文化视域下的语言文学教育创新路径。未来，专业将继续深化国际合作，强化跨学科交叉研究，致力于培养具有家国情怀与国际视野的高层次日语人才，为国家文化走出去战略与区域交流合作贡献力量。

交通指南

一、动车站、机场至会议协议酒店

1. 梅园酒店（福州闽侯大学城店）

酒店地址：福建省福州市闽侯县上街镇国宾大道 350 号

2. 福州大学城永嘉天地亚朵酒店

酒店地址：福建省福州市闽侯国宾大道 268 号永嘉天地（永辉城市生活广场）14 号楼 5-10 层

3. 福州中海凯骊酒店

酒店地址：福建省福州市闽侯高新大道 1-1 号中海寰宇天下 56 号楼

- 福州站：乘坐地铁 1 号线（三江口方向）至南门兜站，站内换乘地铁 2 号线（苏洋方向）至上街站（A 东南口出站），步行约 2 分钟可达梅园酒店，全程约 54 分钟，打车约需 23 分钟；至金屿站（B 口出站），步行约 2 分钟可达亚朵酒店，全程约 53 分钟，打车约需 37 分钟；至厚庭站（B 口出站），步行约 23 分钟可达中海凯骊酒店，全程约 1 小时，打车约需 35 分钟。
- 福州南站：乘坐地铁 5 号线（荆溪厚屿方向）至金山站，站内换乘地铁 2 号线（苏洋方向）至上街地铁站（A 东南口出站），步行约 2 分钟可达梅园酒店，全程约 1 小时 14 分钟，打车约需 28 分钟；至金屿站（B 口出站），步行约 2 分钟可达亚朵酒店，全程约 1 小时，打车约需 43 分钟；至厚庭站（B 口出站），步行约 23 分钟可达中海凯骊酒店，全程约 1 小时 14 分钟，打车约需 33 分钟。
- 福州长乐国际机场：空港快线长乐机场公交站乘坐空港快线上街大学城专线至大学城（旗山梅园）可达梅园酒店；至博仕后购物广场，步行约 9 分钟可达亚朵酒店，打车约 11 分钟可达中海凯骊酒店。全程约 70 分钟（机场快线票价约 50 元，可搜索小程序“元翔空港快线”购票）。

二、本次会议设置会场和交通指南

(一) 开幕式和主旨演讲：福州大学旗山校区图书博学厅



福州大学旗山校区图书馆



路线提示：东门入校，沿图中路线前往图书馆

(二) 分科会研讨：福州大学旗山校区外国语学院



路线提示：北门入校，沿图中路线前往外国语学院

参会人员名单

序号	姓名	单位、职务职称等
1	HAYASHI SUMIKA	福州外国语学校教师
2	Kim JoonYoung(线上)	大阪公立大学博士研究生
3	白阿荣	桂林理工大学教师
4	暴图亚	宁波财经学院外国语学院讲师、博士研究生
5	北条英次(线上)	筑波大学教授
6	曾凌云	福州外语外贸学院教师
7	曾我阳大(线上)	法政大学教授
8	陈思	福州外语外贸学院实践型专任教师
9	陈洪淦	广岛修道大学硕士研究生
10	陈婧璇	集美大学外国语学院 讲师
11	陈凌弘	闽南师范大学外国语学院院长助理
12	陈诗欣	华北科技学院本科生
13	陈思建	福州外语外贸学院副教授
14	陈文佳	华中师范大学中国工业文化研究中心博士研究生
15	陈晓隽	福州大学外国语学院副教授
16	陈雪咪	湖北师范大学历史文化学院硕士研究生
17	陈怡伶	北京外国语大学国际中国文化研究院硕士研究生
18	陈毅立	同济大学日本学研究所所长
19	陈宇帆	厦门大学博士研究生
20	池泽充弘	福州大学外国语学院日本語学科外籍教师
21	戴琳剑	北京外国语大学讲师
22	董素芬	厦门理工学院外国语学院副教授
23	杜爽	莆田学院教师
24	杜志卿	华侨大学教授
25	渡边唯斗(线上)	筑波大学教授
26	樊天	福州外语外贸学院副教授
27	范倩彤	大阪公立大学现代系统科学研究科博士研究生
28	方可欣	福州大学外国语学院本科生
29	方思颖	复旦大学外文学院博士研究生
30	冈本滋史(线上)	大阪公立大学教授
31	高千叶	大连海事大学讲师
32	葛茜	福州大学外国语学院院长助理、日语系主任

33	宫下哲禎（线上）	筑波大学教授
34	关根萌惠（线上）	新潟大学教授
35	关宜平	厦门理工学院外国语学院讲师
36	郭 帅	厦门大学日语系本科生
37	韩 晗	武汉大学景园规划设计研究院副院长
38	郝哲涵（线上）	大阪公立大学博士研究生
39	贺雪瑞	山东工商学院教师
40	黒冈佳柁	福州大学外国语学院副教授
41	胡照汀	韶关学院副教授
42	户崎景太（线上）	筑波大学教授
43	黄彩霞	潍坊学院外国语学院教授
44	黄景爱	福建商学院海外教育学院 副院长
45	黄琪敏	福建技术师范学院教师
46	黄瑞燕	福州外语外贸学院教师
47	黄玮临	福州外语外贸学院日语系教师
48	黄燕青	集美大学外国语学院日语系教师
49	惠 科	四川外国语大学副教授
50	惠子函	中国传媒大学人文学院博士研究生
51	霍 达（线上）	庆应义塾大学博士研究生
52	贾雯博	晋中学院硕士研究生
53	江 左	IDG 资本顾问
54	焦媛媛（线上）	新潟大学硕士研究生
55	金 欣（线上）	东京科学大学硕士研究生
56	金立孚	温州理工学院讲师
57	金丽花	福建江夏学院专任教师
58	金盼盼（线上）	东京大学大学院都市工学特任研究员
59	金山凉太郎（线上）	法政大学教授
60	金雄杰（线上）	早稻田大学博士研究生
61	金燕红	华侨大学国际交流合作处
62	金玉花	福州大学外国语学院副教授
63	酒井英树（线上）	大阪公立大学教授
64	孔祥惠	福建技术师范学院教师
65	赖菲菲	福建师范大学协和学院日语教研室副主任副教授
66	李 兰	成都理工大学外国语学院硕士研究生

67	李 宁	吕梁学院历史文化系副教授
68	李博强	福建师范大学社会历史学院博士后
69	李承纪	沧州师范学院教师
70	李菲然（线上）	大阪公立大学硕士研究生
71	李阜阳（线上）	大阪公立大学博士研究生
72	李乾熠	福建师范大学文学院博士研究生
73	李庆贺（线上）	大阪公立大学博士研究生
74	李亚伟	四川轻化工大学讲师
75	李奕峰	中国船政文化博物馆助理馆员
76	李振政	安徽师范大学讲师
77	立花美咲	福州外国语学校日语教师
78	连小裕	厦门理工学院外国语学院讲师
79	梁 丹	河北科技师范学院教师
80	梁新娟	集美大学日语系副主任
81	廖永倩	福建技术师范学院外国语学院教师
82	林 静	厦门理工学院讲师
83	林莉莉	福建师范大学协和学院讲师
84	林润华	厦门南洋职业学院讲师
85	林宇轩	福建师范大学世界史硕士研究生
86	蔺 静	天津外国语大学日语学院副教授
87	刘景玉	集美大学外国语学院讲师
88	刘清源	广州新华学院专任教师
89	刘婉婷	福州外语外贸学院教师
90	刘一辰（线上）	宫崎大学副教授
91	泷泽重志（线上）	大阪公立大学教授
92	卢佳琦	上海外国语大学讲师
93	陆相凝	复旦大学外文学院硕士研究生
94	吕冬阳	珠海科技学院日语专业教师
95	吕梦琦（线上）	筑波大学博士研究生
96	马婉清	西藏民族大学硕士研究生
97	孟庆利	西北师范大学讲师
98	穆昭阳	湖北师范大学历史文化学院副教授、院长助理
99	潘 呈	广东科技学院讲师
100	彭江浩	湖北师范大学文学院副院长

101	戚丽明（线上）	大阪公立大学博士研究生
102	秦佳	宁波职业技术大学博士研究生
103	邱亲仁	厦门理工学院教师
104	秋叶正美（线上）	筑波大学教授
105	秋原雅人	福州大学建筑与城乡规划学院教授
106	任江辉	集美大学外国语学院日语系主任、教授
107	沙骏雅	陕西师范大学历史文化学院硕士研究生
108	上田博之（线上）	大阪公立大学教授
109	邵帅（线上）	法政大学助手
110	邵春子	珠海科技学院副教授
111	邵海伦	福建师范大学助理研究员
112	沈樱	上海电力大学日语系主任
113	沈丽玉	福建技术师范学院助教
114	时安奇	新世界教育樱花国际日语华南区市场部市场经理
115	松下大辅（线上）	大阪公立大学教授
116	宋宇辰（线上）	筑波大学博士研究生
117	苏美盆	福建技术师范学院助教
118	隋晓蕾	泉州师范学院外国语学院教学部主任
119	孙振华	新世界教育集团市场主管
120	谭雁	玉林师范学院商学院副教授、院长助理
121	谭肖雄	天津大学冯骥才文学艺术研究院硕士研究生
122	汤泽晶子（线上）	东京大学教授
123	唐婧雯（线上）	法政大学硕士研究生
124	唐林洁	澳门大学人文学院硕士研究生
125	藤川昌树（线上）	宫崎大学教授
126	丸山雅美	福州外语外贸学院教师
127	汪徐莹	温州医科大学教师
128	王竣	厦门大学硕士研究生
129	王勤	河南师范大学教师
130	王瑶	首都师范大学讲师
131	王爱红	潍坊学院副教授
132	王黛茜	闽江师范高等专科学校助教
133	王慧杰	福建技术师范学院日语专业主任
134	王佳梦	哈尔滨师范大学教师

135	王龙飞（线上）	大阪公立大学博士研究生
136	王士栋	浙江大学马克思主义学院硕士研究生
137	王先科	福建技术师范学院教师
138	王小梅	河南师范大学外国语学院日语系讲师
139	王雅慧	福州大学外国语学院讲师
140	王子潇	福建师范大学纪检监察学院讲师
141	尾高真辉（线上）	早稻田大学教授
142	翁舒	福建医科大学教师
143	吴格非	中国矿业大学教授
144	吴洁琼	福建科学技术出版社编辑
145	吴林蔓（线上）	筑波大学硕士研究生
146	吴淑招	福州外语外贸学院外国语学院日语系系主任
147	小池志保子（线上）	大阪公立大学教授
148	小伊藤亚希子（线上）	大阪公立大学教授
149	谢静	温州医科大学讲师
150	邢烁（线上）	大阪公立大学硕士研究生
151	徐冬梅	福州大学外国语学院副教授
152	徐文彬	闽江学院历史系教授
153	徐悦超	东北师范大学历史文化学院讲师
154	薛晓燕	信阳师范大学教师
155	杨晖	福建师范大学协和学院讲师
156	杨佳禾	西藏民族大学文学院硕士研究生
157	杨佳乐（线上）	筑波大学博士研究生
158	杨洁冰	河南理工大学讲师
159	杨金颖（线上）	东北师范大学文学院硕士研究生
160	姚云贵	江西师范大学东南亚研究中心教师
161	于宁	邯郸学院教师
162	余鹏正（线上）	法政大学博士研究生
163	詹玮	闽江学院外国语学院讲师
164	张国峰	宁德师范学院语言文化学院讲师
165	张海玲	厦门理工学院外国语学院讲师
166	张焕香	西北师范大学教师
167	张靖苒	复旦大学本科生
168	张俊红	福建技术师范学院日语专业讲师

169	张梦婷	邯郸学院讲师
170	张维天	中国传媒大学硕士研究生
171	张宇星（线上）	筑波大学硕士研究生
172	张泽英	四川大学文学与新闻学院硕士研究生
173	章小叶	福建技术师范学院讲师
174	长田巴菜子（线上）	法政大学教授
175	赵文熙	华北科技学院外国语学院本科生
176	赵泳晴	浙江大学马克思主义学院硕士研究生
177	真野洋介（线上）	东京科学大学教授
178	郑 凤	福建师范大学协和学院外语系教师
179	郑 颖	福州大学外国语学院讲师
180	郑乐静	温州大学副教授
181	郑丽芳	厦门理工学院外国语学院讲师
182	郑松波	福清黄檗文化促进会副会长
183	郑训焜	厦门大学嘉庚学院日本语言与文化学院本科生 福清黄檗文化促进会理事
184	中野茂夫（线上）	大阪公立大学教授
185	钟惠芸	闽南师范大学外国语学院院长
186	钟晓文	福州大学外国语学院院长、教授
187	周 彤	河北大学专任教师
188	朱德茂	福建师范大学硕士研究生
189	朱红军	鲁东大学区域国别学院讲师
190	邹圣杰	厦门大学嘉庚学院讲师

